
最強無敵のチートな最弱高校生

コンスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強無敵のチートな最弱高校生

【Nコード】

N3771I

【作者名】

コンスル

【あらすじ】

俺様は自他共に認める最強能力者。どんな奴だつて俺には敵わねえ。俺はどんな奴だつて片っ端からなぎ倒してきたんだ。けど……。油断しちゃった。たかが鉄砲の弾でやられるなんて思わなかったんだ。まあ、助かったんだけどさ。で、俺は新たな任務を与えられた。ちよつと待て！俺は男だぞ。いくら俺が変装技術に長けてるからって、女子高へ潜入捜査はないだろう。しかし任務にや逆らえん。だから最強無敵の俺様の、嬉しはずかし、ハーレム的女子高ライフが始まったのさ。

第0話 任務

う、撃たれたのか？

ま、まさか？

いや、でも……。胸のあたりは確かに痛い。

視界が揺らぐ。

全てが薄れていく。

これが死？

な、なんで……。こ、この俺が？

ぬかった！

今思っても後の祭り。後悔は先に立たぬものだという事を改めて実感する。

油断した！ 油断しなきゃ、絶対こんなことにはならなかったのに……。

俺は世界で一番強い男なんだぞ。自慢じゃなくて、実際そうなんだ。どんな能力の使い手だろうと、俺は片っ端からなぎ倒してきた。それなのに……。

たった一発の銃弾が俺の胸を貫いて、俺の命を奪おうとしている。油断が祟ったのだ。強さに驕ったのがいけないのだ。

ああ、俺は死ぬ。

死ぬんだったら、いっそもっといろいろやっとけばよかったよ。彼女だって作りたかったし、何より、皆からケチって言われるほど

貯めこんだお金を、もつともつと使つとけばよかった。死んじまったらお金なんてあつたつて何の意味もねーじゃねえか。親も子も兄弟だつていねえから、果たして俺の蓄えた莫大なお金はいつたいどこに行つちまうんだろうね。

ああ、どんどん意識が薄れていきやがる。

ああ、俺は死ぬんだ……。

まだ十七歳なのに……。

死にたかねえよ。ああ、俺にはもつと大きな未来があつたはずなのに。俺にはもつともつと大きな可能性があつたはずなのに。

あれ、俺、もう死んだ？

つてこたあ、ここ、天国？ それとも地獄？

地獄なんだろうなあ。俺つて結構酷いことしてきたもんなあ。そりゃ、まあ、酷いことつて言っても俺なりの大義があつてやったことだから、別に後悔とかしちやいないけどさ。しかし、閻魔大王様が俺の言い分を認めてくれるものかね。

ま、どっちでもいいいさ。天国だろうと地獄だろうと。どうせ死んだことに変わりはないのさ。

なんか変だ。

不思議と感触がある。これは確か……。そうだ。間違いなく布団の布地。

瞼が重いような感じがするけれど、開けられないほどじゃねえ。

だから俺はゆつくりと、力を込めて瞼を開いた。
すると……。

「あんたって、不死身なのね」

人を小馬鹿にしたような声が聞こえる。

こんな皮肉を吐く奴は、世界広しといえど、俺はたった一人しか知らないね。甲高い女ものの声。間違いない。

「三条、お前か」

俺はぎろりとそいつを睨むと、そいつはくすりとはほ笑んだ。心なしか、そいつの目が真っ赤になっていたような気がしたが、気のせいだろう。

「全く、心臓を貫かれていながら平然と助かるなんて、どーかしてるわよ。……でも、あんた、バカじゃないの。結界、張ってなかったの？」

そいつの糾弾はいつだってきつい。俺は「ははは」と苦笑いしながら、力なく「すまん」と言った。

「ま、助かったからいいようなもんだけど、あんた、自分の力に慢心してない？」

それを言われると、かなりきつい。

「普通、末端クラス的能力者だって、結界ぐらい常時展開してるわよ。それを、あんたほどの能力者が、張り忘れるなんて、バ力を通り越して、たわけね」

「……う、うつせえな。し、仕方ないだろ。忘れてたんだから」

「忘れてた、じゃないわッ！ ばかあッ！」

三条は俺の頭にグーパンチをぶつけてきた。これがまた桁外れに痛いのだ。

「ま、まあ、いいけど。でもこれからは気をつけなさいよ。あんたは、ただでさえ命を狙われやすい立場にあるんだからね」

言われんでも分かっているさ。

現に、俺はいつも俺の命を狙う奴と戦ってきた。どういうわけか、俺の命を狙う奴は多いらしい。俺の最強伝説を聞きつけた有象

無象が、自分の名声に箔をつけるべく俺の命を狙ってくるのだ。俺を倒せば、裏社会で名が上がる。仕事も増える。ってな具合。

しかし俺はそういう身の程知らずを片っ端からなぎ倒してきた。そして、いつしか俺の名はますます高まり、ついには最強無敵の十七歳として認知されるようになった。けれど、それがさらなる敵を招く悪循環。結果、油断してこの有様じゃ笑うに笑えねえ。

「そうそう」

しばらくしたころ、三条が思い出したように口を開いたので、

「なんだ？」

と、俺は尋ねた。

「これ！」

そう言って彼女が手渡してきたのは、一枚の封筒だった。相変わらず味気ない、何とも不気味な黒色の封筒であった。

「任務か？」

俺が尋ねると、三条は静かに頷いた。詳しくは見てみる！とでも言わんばかりの彼女の視線を感じて、俺はそれをゆっくりと切り開いてみた。

すると……。

そこにはいつものように一枚の紙があった。そして、任務の具体的内容がすらすらと記されている。

「って、ちよつと待て！　これ、どういうことだよ」

待て待て待て待て！　聞いてない。こんな任務を、やれっていうのか？

「そうよ」

三条は相変わらず淡々と答えた。

「本気で言ってるの？」

「本気よ。大マジ！」

彼女がにやりとほほ笑むと、

「感謝しなさいよね。私もお目付け役として、あなたの任務に同行することになったのよ」

と、言った。

同行？ 任務？

いや、待て！ 任務って、これ？

俺は何度も、何度も、眼を皿にして紙を見た。何かの間違いじゃないのか？ いや、間違いであってほしい。っつーか、間違いだろ！ しかし、一言一句、食い入るように眺めてみたけれど、間違いはなさそうだった。組織からの公式命令書に、間違いなんてあるはずがない。

「ってことは、何か？ 俺に、女子高に、入ってたのか？」

三条をぎろりと睨んで、八つ当たりするかのように、我ながらおぞましいほど冷めきった声を吐いた。

「そうよ」

三条は相変わらずだ。

「あんたは女子高に入るの。なんでかは、そこに書いてあるでしょ。スパイよ」

「……待て！ 俺を見る。俺が女子に見えるか？」

男だ。言つとくが、俺は男だ！ 間違っても女じゃねえ。

顔立ちだって男だ。まあ、中性的な顔だねとは言われるけれど、でも男なんだ。女にないものを持つてるし、女にあるものを持ってない。俺は男なんだ！ なんで女子高に？

「問題ないわ。変装すればいいんだから」

「へ、変装？」

ぐぬぬ。変装と言えば、俺が十八番にしている術だ。男だろうと女だろうと老人だろうと子供だろうと、動物だろうと植物だろうと、俺は何にでも変化できる……、って植物は言いすぎか。さすがに、植物にはなれねえ。

だから女になり済ますことができないわけじゃない。けど……。

そりゃ、一日二日三日四日ぐらいたったらいいさ。けど、女子高に潜入して何日過ごすんだよ。

「そうね。ざっと一年？ 任務の状況によっちゃ、卒業までだから三年ね」

「さ、三年！」

待て！ そんなに女性やってたら、精神が持たん。俺は確かに変装技術には長けているが、演技力はねーんだぞ。

「だから私が目付役としていくのよ。あんたのフォロー役としてね」
三条はニタニタと笑い、戸惑う俺の顔をぎろりと睨みつけた。

あ、悪夢だ……。

第0話 任務（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第1話 ルームメイト

日本の女子高。

初めて見る。

ってか、俺は十七歳で、普通だったら高校二年ぐらいの年齢なんだろうけど、高校なんて行ってる暇もなかったから、学歴は中卒で止まっている。

だから高校を見ること自体が初めてであったりする。

とまあ、そんな俺が抱いた第一印象。

案外普通。

それだけ。

「何やってんの！ 早く行くわよ。入学式、始まっちゃうわよ」

三条に急かされ、急ぐ俺。

体育館らしいどこかい建物に入って、席に座る。スーツ姿のおっさんとかおばさんとかがいっぱいいて、それに対して主役たる入学生は、当然女ばかりなわけで……。

ってか、やっぱし馴れないな、スカートってのは。セーラー服そのものは、まあ別にいい。どうせ軍服みたいなもんだしな。

能力使って女子に化けるから、まあ見抜かれるわけもないはずなんだけど、元が男だから緊張するぜ。何しろ何百人って女子の中で、男なのは俺だけなんだぜ。紅一点ならぬ黒一点？ しかし、女子高っていう割に、教師たちは男ばっかなんだな。ちょっと安心？ さっきから眠たくなるような呪文を延々と唱えている校長とかいう爺も、男だしな。

入学式とやらが終わると、俺は静かに学校を飛び出した。

寮つてのがあらしい。競争倍率は結構高いらしいけど、そこはそれ。組織のコネってやつで、俺は特等室を宛がってもらったわけだよ。学校のすぐそばで、駅に近く、近くにはスーパードって本屋だって、バツティングセンターだってボウリング場だってあるぜ。たまには女から解放されて、男っぽい遊びをするには不足ない場所さ。

なーんて思ってた寮に入ると……。

いやはや、当然なんだけど、女子寮なんだな。これが。

ちなみにルームメイト付き。そのルームメイトが男であるはずもなく、当然のようにそこにいたのは、女子だった。

「あ、君が私のルームメイト？」

彼女はにこりと笑って、軽くお辞儀した。俺の正体が男だなんて、ちいとも思っていないようだ。ま、その方がありがたいけど。

俺は側にあつたソファアに腰を下ろす。

うーん、気持ちいい。

考えてみると、俺のこれまでの任務つてのは、暗殺だったり、誘拐だったり、はたまた要人の護衛だったり、あんまり楽しいもんじゃなかったな。こうやってのんびりソファアに寝転がれるのは、ありがたいよ。

と、思ったりしていると、側にいたルームメイトが、やおら服を脱ぎ始め、御着替えを始めた。俺は男だぞ！ 男がいるのに、年頃の女が着替えなんてするな……、あ、そうか。俺は今、女だ。

既に女は下着だけの、あられもない姿になっちゃった。ちよつと待て！ 反則だ。俺は別に、見たくて見てるわけじゃねーんだよ。痴漢じゃないからな。

すると、女はブラジャーまでも取ろうとした。もうここまでくると、なるようになれとしか思えない。役得だ。ぐらいに思っておこう。俺に、こんな面倒くさい任務を任せた組織が悪い。これぐらい

な特典がなけりや、やってられんさ。

すると、バタンツ！

突然、ドアが開いた。

「なに、やってるの？」

殴りこんできたのは三条だった。

俺は慌てる。なんて言おうか。慌てて眼を隠し、ソファーに顔を埋めた。

「お、俺は何もやってない。見てもないぜ」

もう演技もくそもない。声色こそ甲高いが、口調はどこまでも男っぽかった。いや、中身は男なんだから、男の口調と断言したっていい。

三条は俺をぎろりと睨みつけ、

「ちよつと来て！」

と、言った。

ルームメイトの女は、下着姿のあられない姿で、きょとんと俺たちを見つめている。

「あ、あなた誰？」

彼女が三条を指さして言った。当然の質問だ。いきなり部屋に入ってきた女に、家主が「あんた誰？」と尋ねることに、何の矛盾があるう。

「こいつの……、い、いや、彼女の友達よ」

もちろん、俺が男だ、なんてことがばれたらいけない。だから三条は慌てて「彼女」ってところを強調しつつ、俺をしょっ引いていた。

「なにやってたの」

路地裏に連れられた俺は、ふと、かつあげされているいじめられ

っ子になったような気分がした。

「確かにあんたは女になったし、女子寮に暮らすことになったけど、だからってね。覗きは絶対駄目なんだからね」

分かっているさ。俺だって好き好んで覗き行為に及んだわけじゃないぜ。あいつが勝手に脱いだからいけないのさ。

「でも駄目なの。彼女が脱ぎ始めたら、あんたはすぐ自分の部屋に逃げ込みなさい。いーわね」

なんでだよ！　せつかくの役得を見逃すなんて選択肢は、俺にねーぜ。いやあ、ああいうメリットがあるんだったら、最初に言ってほしかったね。あんなの見せられたら、女に変装して女子高に乗り込むってのも案外悪くない。

「スケベ！」

三条がじとつとした目で俺を見てくる。フン！　男なんてもんはな、みーんなスケベなんだよ。十五歳以上になった男子のスケベ率は、限りなく百パーセントだぞ。まあ、例外もいるから、百パーセントとは言わんけどね。

少なくとも、俺はスケベだ。そして、それが健全だとはつきり言える。自分はスケベじゃない、なんて公言してる奴の方がスケベだってことは、数々の事例が明らかにしてるじゃないか。

「数々の事例って何よ？」

三条は相変わらず、俺をぎろりと睨んできた。

「とにかくね。駄目なんだからね。いーい。お目付け役の私の命令は、即ち組織の命令と同義と思ってちょうだい」

「わーかったよ」

俺は不貞腐れたような顔をして、仕方なく頷いた。まあ、確かに、覗かれる女性のことを思えば、覗き行為はやめたほうがいいと思う。俺だってそれほどに悪魔じゃないから、それぐらいの道理は弁えているさ。

キヤアアア！

いきなり響く悲鳴。

俺と三条は揃って駆ける。

すると、すぐそばの路地裏で、俺たちと似たような光景……、もと、正真正銘、かつあげされそうになっているか弱き女子生徒を発見した。

いや、紛れもなくルームメイトじゃねえか。

野郎数人が、彼女によつてたかつてなにやらいけないことをしようとしている雰囲気だった。

「やめろおおッ！」

俺は怒鳴る。さっき、覗きをしてしまったお詫びも兼ねて、彼女を窮地から助けてやらねばならんと思ったのだ。

「お、また美人が二人も」

男たちは、下品な顔をさらに下品色に染めて言った。

うーん。欲望に目が眩んだ男に見られる女性の気持ちがよくわかる。あんまりいいもんじゃないな。ってか、気持ち悪い。

「下がれよ、下種ども！ もし下がらんなら、殺してやるぜ」

俺の顔は、おそらく他人から見ると滅茶苦茶怖くなつてんだろうなあ。何しろ、俺の眼光を見るだけで、どんな奴もびびつてたからな。三条が言うには、「殺気のこもった目」で、上司が言うには「悪魔のような目」らしい。

ま、いずれにしても俺を相手にしたのが悪かったな。

お前らなんて、左手小指一本で倒してやらあ。

ピカツと光つて、それで終わり。

何とだらしない男たちだろう。俺が小指から出した光線一発でダウンしちゃうんだからな。格闘するまでもなかったじゃないか。けど、助けるべきルームメイトまで気絶さしちゃったのはまずかったかな。まあ、眩い光で眼つぶしただけなんだけど、彼女、サ

ングラスとかつけてなかったからなあ。

とりあえず俺は、三条とともに彼女を部屋に運んだ。能力を使うことが許されるんだったら、一人でも運べたのに。宙に浮かべたら、それこそ小指一本で済む。

「バカね。そんなことしたら、私たちが超能力者ってばれちゃうでしょ」

三条はそう言って、くすくすと笑った。

「にしても、あんたってばほんと強いわね。あんなまぶしい光、見たことないわ」

閃光弾のような技『光閃』は、まあ超能力者なら使えて当たり前、基本中の基本の技であるけれど、どれだけ眩い光を出せるかってところに、超能力者の技量が絡んでくるわけだ。

ま、俺様クラスになったら、それこそ視力を失うぐらいの光を放つことだって可能なんだぜ。ま、さっきは俺の持つてる力の20パーセントも出しちゃいなかったから、一日二日目が見えないぐらいで済むだろうけどね。

「俺は最強なんだ！ 無敵なんだぜ」

胸を張って、はははと笑う。

三条は相変わらず「そうですね」と呆れたように苦笑いしていた。

俺は部屋に入り、ルームメイトの顔をまじまじと見ていた。

うーん、綺麗な子だ。三条も可愛いが、彼女はそれ以上だ。胸も三条よりはる。髪の毛はさらさらしているし、肌は透き通るように白い。

「うーん」

しばらくすると、彼女は静かに目を覚ました。彼女もまた俺の『光閃』を思い切り浴びてはいたけれど、まあ、俺が治療を施したから、既に視力は回復してるはずだ。

「あ、大丈夫かい？」

俺はそう言ってから、慌てて口をふさいだ。

「だ、大丈夫、かしら」

そっだ。俺は女性なんだ。女性らしい声を使わなくちゃいけない。

「う、うーん」

彼女はゆっくりと起き上がる。そして、

「わ、私、鷹司^{たかつかさ}亜子^{あき}って言います」

そう言ったかと思うと、彼女は再びソファの上に気絶した。

第1話 ルームメイト（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第2話 小さなパートナー

はい？

鷹司亜子さん？

ってか、そこまで言っただけで眠らないですよ。こっちは名乗ってないし、それにさ……。

って、まあいつか。どうせ一緒にいたって面倒なだけだ。彼女が倒れてくれたら、それだけ気楽してもんさ。女の振りをしなくてすむからな。

でも、いきなり暇になっちゃったなあ。

いつそ、三条でも呼ぶか？ いや、あんな口うるさい奴を呼んだりしたら、また「遊んでないで、仕事しなさい！」と言っにきまってるんだ。赴任早々、仕事なんてやってられっか。俺はのんびり仕事に取り組むことを信条としているんだ。

じゃ、何しよう。このままここにいてもつまらん。

あ、そうだ！ 外に行こうか。確かバツテイングセンターか、ボーリング場があったはずだ。そこで思い切り、溜まりに溜まった憂さを晴らしてやるのも悪くない。

ただ俺はバツテイングよりボーリングのほうが好きなんだよね。しかしだ。一人でやるボーリングはちょっと……。友達とやるから面白いのさ。ま、友達と言える友達なんて、ほっとんどいなかったがね。

ま、結局これといってやるべきことが見つからなかったんで、仕方がないから俺は部屋で寝ることにした。疲れたしな。

自室に入ると、これがまた嫌になるぐらい女の子風な飾り付けが

してあった。俺がしたわけじゃないから、組織の奴らがそうしたんだろう。俺の正体が男であるってことをルームメイトたる鷹司に疑われないようにするために……。

すると、机の上に一枚の紙が置いてある。俺たち『組織』に所属しているメンバーしか見られないよう、特殊な力が施されている紙だ。通称マジックペーパーっていうらしい。なんて安易なネーミングなこと！ と、心の中で突っ込んでおいて、とりあえず俺はそれに目をやった。ま、俺は『組織』のメンバーだから、マジックペーパーに記された文字を読むことなど、造作もないことだった。

『この部屋は決して荒すべからず。君は御淑やかな女性を演じなければならぬ。もしも男であると発覚したら、即刻帰還すること。無論、その際には報酬も支払わないので、そのこと良く理解しておくこと』

と、記されていた。

ハア？

あほ抜かせ！ 御淑やかな女性ってなんだよ？ それにだ。ばれたら報酬なしってどういう意味だ！ 多額の報酬を呉れるって言うから引き受けた仕事だぜ。じゃなかったら、誰がこんな仕事引き受けるってんだ。女の子じゃない世界に、たった一人乗りこむ男の孤独を、組織のお偉方も少しはわかってほしいね。その上、そんな趣味もないのに女装させられている俺の気持ちは……。

しかし、そんな不満が組織の御偉方に届くはずもなく、気がつけば、任務を記したその公式文書は、跡形もなく消え去っていた。

しばらく寝転がっていると、

「ご飯できたわよ」

何とも言えず懐かしい台詞が、声高に響いてきた。

ご飯？

あ、そうか。もうこんな時間か。確か世間一般的には、今ぐらいに夕食を食べるのだろう。そんなまともな生活とは無縁の世界に生きてきた俺にとって、それは結構新鮮であつたりする。

って、ご飯？

鷹司が作ってくれたのかな？

なんて思つて、部屋を飛び出すと、まさしく想像通りだつた。彼女のはかほかのご飯を作つて、俺の到着を待っていた。

「つ、作ってくれたのか……、い、いや作ってくれたの？」

「ぎこちない物言いが、少し憂鬱。俺が男だつてばれたりしたら、報酬がパーだ。何としても、女であると思ひ込ませねばならん！」

「え、あ、ごめん。嫌だつた？ わ、私、そろそろご飯にしようかと思つて作つただけで、ちよつと余つちやつたから。あなたにもあげようかなつて」

「いやいや、嫌なわけではないじゃん！ こんなあつたかい飯なんて何年ぶりだろうね。しかも滅茶苦茶美味そうじゃん。コンビ二弁当かはたまたコンビ二おにぎりか、そんなもので飯を済ませてきた俺にとつちや、宮廷の贅沢な御馳走よりも御馳走っぽく見えた。」

それにさ、こんな可愛い子が、俺なんかのために飯を作ってくれたんだぜ？ 断る理由がどこにあるよ。あー、それにしても返す返すも女の格好をしている自分が憎らしい。真の姿おこしに戻って食卓につけば、さながら新婚さんのように見えるのに……。

数日後。

俺は学校に出向き、教室に入った。

やーっぱ、女しかいねえ。右も左も上も下も、全員女だ。廊下を歩いていても、出くわすのは女ばかり。男性教諭と出くわしたりしたなら、まだ救いもあったが、残念なことに彼らと出くわすことはなかった。

クラスに入っても当然女しかないわけで……。世の中にはこんなに女がいたんだということを改めて実感する。彼女たちは皆、きやいきやいと甲高い声を張り上げながら、何やら楽しそうに騒いでいる。昨日見たドラマの話とか、芸能雑誌の話、ファッション雑誌の話に明け暮れている。当然、俺にはついていけない。

いつものように出席番号順の席に腰を下ろした俺の心境を簡潔明瞭に表現しよう。

肩身が狭い。

それだけだ。

奇しくも三条とは一緒のクラスで、朝のホームルーム早々に行われた席決めクジ引きの結果、彼女は俺の真後ろの席に陣取ることになった。

うーん、これは何の偶然だろう。いや偶然じゃないのかな？　そういや、三条の手にかかれば、クジ引きなんかに興味はなかったなあ。いつは情報操作（？）みたいなことが得意な奴なんだ。絶対クジ引き結果も密かに改ざんしたに違いない。

とはいえ、俺にとっても好都合だ。大体、女しかいねえ、非常にアウエーな世界で、一人孤独に取り残されることほど嫌な話もないせめて知り合いの三条ぐらいが近くにいてくれた方が心落ち着くってもんだ。何しろ俺様は自他共に認める最強戦士だけだよ、女には弱いのだ。それがもう滅法弱いのだよ。それでもかつてほど弱いわけ。昔からそうなんだけど、こればかりはどうしようもないんだよね。女の子に対して強気に出られるのは、今は亡き母さんか、幼いころからの付き合いの三条ぐらいなもんだぜ。

だからさ、

「あ、隣だね。よろしく」

と、楽しい顔をして挨拶して来たルームメイト、鷹司亜子を見ると、心が何となくどきまぎしてしまうのだ。

それから授業が始まって、あつという間に一日が終わった。

ってか、授業ってこんな退屈なのか？

何しろ、女子高とは思えないほど男率の高い教師たちの、まるで子守唄のような言葉を延々と聞き続けねばならなかった。苦痛以外の何物でもねえだろ！ その中身だって、教科書をそのまま読んでいるだけの、何とも意味のない代物でしかなかった。これだったら家に戻って教科書読んどけ！ って言われた方がマシだ。

こんな教師たちなら、某小説ヒロインのようにけちよんけちよんに叩きのめしてやるのも悪くない気がしたが、まあ、俺にはそんな度胸もないので黙っておく。ま、机の上で眠ってる分には気持ちいいから、さして文句をつける気にもならなかったのだが……。

そんなこんなで授業が終わり、俺は学校の外に出た。

とりあえず俺には任務があるわけだけでも……。ま、今日ぐらいいはいーだろう。ボーリング場にも行って、思い切り暴れてくるかな？ 寝すぎてちよつと頭がぼんやりしているんだ。

「やめとけ」

どこからともなく、そんな声が聞こえる。

俺はうんざりとしたような顔で、「喋るな」と、言った。

「喋るなって、そりやないだろうよ、相棒！」

そいつは俺のスカートの左ポケットから、にきよきつと姿を現した。ネズミ、というかハムスター。名前はランと言って、俺のペット兼参謀兼相談相手兼友人でもある小動物だ。

ちなみに俺を含めた能力者たちは、皆、こうした小動物たちをパートナーとして従えている。賢いし、器用だし、独自の特殊能力を持っているから、これがまた結構使えるんだ。話し相手にもなるしね。

ただ、どんな小動物でもパートナーにできるっていうわけじゃなくて、組織がパートナー用に育て上げた小動物たちだけがパートナー候補となりうるのだった。俺たち能力者はその候補たちの中からこれといったやつを選び出し、パートナー契約という儀式（要するにキス）をすることで、正式にパートナーとなるわけだ。一流の能力者なら、少なくとも一匹以上のパートナーを従えているのが普通で、パートナーのいない能力者は、例え特殊能力を使えても能力者とは認められないことになっている（例外として組織が特例として能力者と認めたら、パートナーの有無にかかわらず能力者らしい。規定はあいまい）。

それはともかく、ランという名のハムスター型パートナーは、「ま、とにかく、ボーリング場はやめとけ！ 三条に睨まれるぞ」などと言いながら、俺の長ったらしい髪の毛を伝って肩まで上ってきた。

「フン。三条がなんだって言うんだよ！ 俺はな、あいつの部下でも家来でもねーぞ」

使い魔……、もといパートナーでもあるランは、ハアと露骨なほど大きなため息を吐いて、

「けど、三条が怒ると怖いぞ。仕事をほったらかして遊んでた……、なんてこと、ばれたら三条はどう思うかな？」

なんて言っている。

しかし、そう言われるとちよつときつい。三条が激怒する姿は、確かに怖いのだ。

「じゃあない。わかったよ、わかった！ ほかならぬパートナー様のお言葉だものな。やってやるよ。仕事ぐらい……」

怒られるのは嫌だからな。鬼のような形相で怒り狂う三条のおぞましい顔を思い出しながら、俺は仕方なく、ハアとため息を吐くと、校舎のほうへと戻っていった。そして生徒用女子トイレ（男子トイレなんてものは存在しないが）に入って、特殊能力の一つたる『カメレオンモード』（命名、俺！）を発動すると、静かに、しかし我

が物顔で、職員たちでこつた返す職員室に、誰にも気づかれることなく入っていった。

第2話 小さなパートナー（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第3話 異常な能力者

「なーんもねえな」

ハムスター型パートナーのランが、その愛くるしい図体とはかけ離れたぶつきら棒な口調で言い放つと、

「確かに」

俺は呆れたように、全く何もない職員室のデスクを睨みつけていた。

周りの物体、あるいは背景と完全同化する、俺の得意技の一つたる『カメレオンモード』のおかげで、職員室にてわいわい騒いでいる教師たちは、全く俺のことに気づいていないようだった。

結局、収穫はゼロ。ってまあ、一朝一夕に見つかるもんでもないだろう。こういうのは地道に着実にやってくるのが一番の正攻法なのさ。

とは言ったものの、よくよく考えたら、我らが『組織』の壊滅を目論んでいる裏切り者たちの、裏切りの証拠なんてものが、こんな職員室に都合よく転がっているものだろうか。彼らだって、命をかけて裏切り行為をしているんだ。こんなところに証拠を置き忘れたりするだろうか。

「しねーだろうな」

ランが淡々と呟くと、

「だよなあ」

俺は静かに呟き、苦笑いした。

「とりあえず今日のところは引き揚げようぜ」

そんな俺の言葉に、「そうだな」と頷くランであった。

「収獲は？」

カメレオンモードのまま、職員室を出た俺を待ち構えていたのは、三条だった。変なメガネをかけているが、それも俺たち能力者にとつては必須アイテムの一つであった。何しろ、それを通して見ると、『カメレオンモード』使用中の俺の姿もくつきりと見えるのだ。逆にいえば、それを使わなければ俺の姿は見えないわけで、よく『カメレオンモード』を駆使して姿を眩ます俺を探す役回りになることが多い三条にとっては、まさしく必須アイテムであった。

「無し」

俺はきっぱりと答えて、カメレオンモードを解除した。すると、背景と一体化していた俺の体は、ビリビリって変な音とともに、やがて美しき少女の姿を取り戻した。

「無しって、本当に探したの？」

「探したって！」

フン。俺はやると決めた仕事はそれなりにきっぱりやるほうだぜ。まあ、今回は確かにやる気はなかったけど、だからって手を抜いたわけじゃない。確かに職員室内には、何の証拠も見つからなかったのだ。組織を揺るがすかもしれない陰謀って奴はな。

って、まあ、そんな大事なものが職員室にあるわけもなく……。

明日は校長室かなんかに潜入して探してみるのも悪くないかな。

「それはそうと、ところで、あんたに頼みたい仕事があるの」
仕事だって？

「そう。この近くでさ、能力者が暴れてるらしいのよね」

「能力者が暴れてる？」

「なんだ、そりゃ？」

「それがね、なんか滅茶苦茶強いらしくて、組織の人間の力だけじゃどうにもならないらしいのよね。今のところは、組織の土地の中に押し込めてるんだけど、このままあいつが暴れ続けたら、絶対、一般人にも迷惑が出る。だから、最強のあなたにあいつの退治を任せたいんだってさ」

「……」

全く、組織の人間は俺をなんだと思ってるんだろうね。確かに俺は自他共に認める最強の能力者で……。

「あんたが最強でいられるのは、U M Tのおかげでしょ」

三条はきっぱりと言って、俺をぎろりと睨んできた。

「全く、最強最強って……。確かにあんたは強いけど、U M Tがなかったら、ただの普通の人なんだからね。全く、卑怯よ」

フン。だからなんだ！ 確かに俺の最強は、俺自身が生まれつき持っていた先天的な力ではない。まあ、努力して得たものではあるけれど……。

アルティメット

マジック

ツール

U M Tってのは、Ultimate・Magic・Toolsの略称で、最強魔法具とか究極魔法具なんて呼ばれている代物だった。組織に所属していた、とある科学者が組織の密命を受けて極秘裏に開発したもので、能力者の力を限界以上に強める力があるそうだ。ただ、使いようによっては世界をも破壊できるU M Tの乱用を恐れた科学者が、使用できる人間を大幅に限定したため、結局のところ、今現在、U M Tを使用できるのは俺一人となっていたのだった。

なぜか？

そんなのは簡単である。科学者は自らの血縁者のみにU M Tを使用できるようプログラムしたからである。んで、俺はその科学者の息子。他に血族はというと、兄弟は元々いない。親父も御袋も死んでしまったし、叔父も叔母も祖父母もみんな死んだ。ってなわけで、現在U M Tを使えるのは俺一人だったってわけだ。

「まあ、いいや。んで、その仕事の報酬は？」

基本的に俺は金で動く。

「五百万」

三条が左手に五本の指を立てると、

「分かった」

俺は満足して、にやりと笑った。

臨時のバイトとして五百万は嬉しいね。どうせ、相手なんてすぐに倒せるのさ。

三条に連れられ、トチ狂った能力者が暴れているって場所に向かう。ちなみに、俺は既に女装を解いている。学校内じゃないから、女装している必要性は全くない。久しぶりの本当の姿に、俺は何となく安堵した。自由だ！　って心の底から叫んでみたい気がする。

それはともかく、三条に案内されてやってきた場所では、確かに能力者が大暴れしていた。光弾を乱射しまくって、さながら戦場のようになっている。組織の能力者たちがよってたかつて彼を倒そうとしているが、全く相手になっていない。

「三条、あいつらを下がらせる。俺一人でやる」

俺はふんわりと宙に浮かびあがると、

「いーの？　また油断して、殺されたらどーするの？」

三条がしきりにこつちを見つめてくる。

「殺されたらって、まだ俺は殺されたことはねーよ。殺されかけたことはあるけど」

「どっちもいっしょよ」

とにかく俺はすぐりよる三条の視線を振り切って、異常能力者の下に向かった。

「勝てるかい？」

途中、ランがそんなことを言っただけで笑ってきた。

「お前は俺が負けるとでも思っているのか？」

「いーや」

ランは相変わらず、俺の肩の上で笑っている。もう少し、ハムスターらしく大人しくしていてくれないかね。全く、愛くるしい容貌とは打って変わって、飲んだくれの親父のような奴だ。

「お前、なんで暴れてんだ？」

そいつの目の前に出向いて、俺は大声で叫んでやった。

「煩いッ！ 貴様は誰だ？」

問われたから、名前を教えてやる。ま、名乗るのは礼儀だからな。すると、そいつの顔が一気に青ざめた。

「お、お前……。あ、あの最強能力者……」

どうやら、名前ぐらいは知っていたらしい。俺も随分と有名なことよ。

「い、いや。お前が最強だろうと、今の俺には敵わねえ」

何やらストレスの余りに理性が効かず、暴走してしまったサラリマンのおっさんのような顔をして、そいつは俺を睨んできた。

さて、こいつは何の根拠を持って、自分には敵わんとか言っているだろう。俺の強さを知らんわけじゃないだろうに。

まあ、いいか。こういう煩い奴には、俺の強さを思い知らせてやるのが一番なんだ。

ってなわけで、俺は腕を構えて、力を集中させる。超能力を駆使して、大自然に集まる力という力を、己が手のひらに集約させた。

「死ね！」

そして、放つ。

ピカッと凄まじき閃光が輝き、集約された力は、一つの大きな球となって、身の程知らずの異常能力者の下に放たれた……。

だが。

あれ？

無傷？

なんで？

そいつは平然とそこに突っ立っていた。俺の攻撃を受けて、平然としていた奴は、これで二人目だ。ってか、なんでこいつにこんな防御力があるんだ？

「くつくく。お前の力はその程度か？」

そいつはどうやら、自分の体に凄まじき力を集めて結界を張っていたらしい。

「貴様、何者だ？」

いくら強い結界を張ろうと、俺の攻撃を防ぎきれた奴は、これまでに一人しかいなかったはず。そいつは見るからに強そうで、実際強かったわけだが、目の前でうだうだ暴れまわっている男は、決して強そうには見えなかった。

すると、答えが返ってくるより前に、そいつの攻撃が押し寄せてきた。

「前だ、前ッ！」

ランが怒鳴る。

俺は慌てて結界を張り、それを防いだ。

「くそッ！ 不意打ちか」

俺はそういうことをされるのが一番嫌いなのだ。

だから、

「死ねええッ！」

もう、あいつを生け捕りにするとか、そんなことはどーでもよくなっていた。やたらめったらあちこちに乱射して、あいつの動きを封じると、両手を天高く振り上げて、そこに俺の力を限界以上に込めた超巨大光球を作った。

そして……。

思い切り放り投げる。

もし、あれが大地にぶつかったら、それこそ数百メートル四方が吹っ飛ぶんだろうな。なんて思いながら、球の行方をじっと見守った。

そいつは無謀にもそれに立ち向かおうとした。避けりやいいものを、「俺ならこんな屑球なんて防ぎきって見せるさ」なんてかつこつけて、挑みかかっていったのだ。

まあ、さすがにあいつもなかなかねばったよ。

けどな、それは最強と称えられている俺が、あらゆる力を込めて

作った正真正銘、最強の中の最強の光球だぞ。あいつごときに迎撃されてたまるかよ。

実際、そいつの結界は破裂して、そいつは墜落した。球は花火のようにダアアアアンって轟音を張り上げて、空中にて大爆発したが、どうやらそいつは、辛うじて生きているようであった。

「やりすぎ」

三条がぎろりと睨んでくると、

「仕方ないだろ。あいつ、強かったんだから」

俺はそう言って返した。ああいう敵を相手に油断したら、それこそこの前みたいに死の淵に追いやられることになるんだ。ま、あのときはもろに油断しちゃったが。

「ところで、あいつおかしいぞ。自分の力以上の力を出してた。っていうか、自分の力を制御できていないようだったな」

「……どうということ？」

三条が不思議そうに首を傾げる。

「要するにさ。あんなおっさんに、あれだけの力が出せると思うか？ 何らかの仕掛けがあるんだ。あのおっさんに、あれだけの力を与えた、何かの仕掛けが……」

それが何なのか、俺にわかるはずがない。そういうことを調べるのは組織の仕事さ。俺には関係ないね。それに、俺には俺で、本当の仕事があるんだ。

「あ、そうだ。組織の会計係に言っとけよ。報酬はいつもの口座に振り込んでけってな」

俺はそう言って立ち去る。

ちよつと疲れた。何しろ、久しぶりに全力を出しちまったからな。

第3話 異常な能力者（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第4話 ニックネームはイチさん

「ねえ、これどう思う？」

鷹司亜子が聞いてきた。

どう思うと問われて、こうですよと答えられるほど、俺は彼女と親しくない。それにだ。彼女は相変わらずの下着姿。俺には答えられるような精神的余力がない。

彼女は二着の服を持ち出して、どっちを着るか悩んでいるようだった。

「やっぱ、こっちのほうがいいかしら？ それともこっちかしら？ うーん、迷っちゃう」

迷うな。速攻で選べ！

服なんてどっちでもいーだろう。俺なんか、三秒で選んだんだぞ。着替えにかかった時間は五分もない。しかしこいつは……。着替え如きに何分かけてんだよ！ それにだ。どっちの服も可愛い感じがするし、どっちも鷹司なら似合いそうだ。元がいいんだから、どんな服を着たって、モデル並みに似合うさ。

「こ、こっちでいーんじゃないかしら」

俺は仕方がないので、右の服を選んで指さしてやった。

「え、こっち！ 私もこっちがいいーと思ってたのよ。なんか、イチさんとはセンス合うね」

「そ、そうかしら」

ぎこちない女語で答えておくと、俺は静かにため息を吐いた。つてか、イチさんってやめてくれ。いつから俺はイチさんになったのだ。

あだ名らしい。俺が本名を明かした0・3秒後に、鷹司亜子が命名したニックネーム。

とにかく、鷹司はそこで下着までも脱ごうとしたので、俺は仕方なく「トイレに行く」と言ってトイレに逃げ込んだ。本来なら、あ

られもない下着姿となった時点で逃げ出すべきなのかもしれないが……。しかし、露骨に裸を避けて逃げ続けると、変に疑われるかもしれない。俺が男であるとばれるわけにはいかないのだ。とはいえ、下着姿まではまだ我慢できるが、全裸になられたら、俺のリビドーがおさまらない。だから逃げるのだ。俺のリビドーが爆発して暴走しちまったら、取り返しがつかんからね。

それはともかくトイレに入り、便座の上に腰かけていると、なんとなくそばにあった鏡に目をやった。

そこにいるのは、確かに俺……、なんだけど、俺じゃない。髪はすらっと伸びていて、女優のように整った顔立ち。スマートな体に出るべきところはしっかりと出ている。

俺が理想だと思っている女像そのまんまの姿が、鏡にはしっかりと映し出されていた。

「けッ。お前さんもご苦労なこったな」

そんな様を見て、ランはにたと笑っていた。

「煩い。俺だって好きでこんな格好になってるわけじゃねえ。任務だよ、任務！」

「くつくく。任務ねえ。けど、お前さんも満更じゃないんだろ？ 何しろ、ハーレムみたいなもんじゃねえか。右も左も上も下も、ぜーんぶ女子ばっか！ あんな可愛いこちゃんと一つ屋根の下で暮らせるんだぜ」

ハーレム、ねえ。

ま、確かにそうかもしれない。女つ気なんてほとんどない殺伐とした毎日を過ごしてきた俺にとっては、本来天国のような世界なのかもしれない。

だが、毎日登校するたびに、言いようのないアウェー感を感じている俺の身にもなれ。

「そうか？ アウェー感っていうほど、お前にとってアウェーな場

でもないと思うが。何せ、学校じゃもうずいぶん多くの女子連中と親しくなったっていうじゃないか」

い、いや、それはだな。

「ま、たかが任務だけど、楽しめや。どうせ、一生二度とはこない学校生活だぜ。変装技術とカメレオンモードが使えるお前の能力が認められて与えられた、またとない学生生活なんだぞ。思い切り楽しんで、思い切り遊べや」

ランはぶつきら棒にそう言っ、かつかつと笑った。俺は煩いハムスターの口を強引につぐむと、そろそろいいだろうと思って外へ出た。無論、別に用を足したわけではないけれど、偽装工作として水を流すことも忘れない。ジャアアアって音がないと、トイレに逃げ込んだ理由を疑われかねないからな。

その日は休日だった。

ってわけで、俺は鷹司と街中を歩いているわけだが……。

普通だったらデートなんだろう。けど、そう感じられないのは、俺の容姿のせいに違いない。何しろ女だ。中身はともあれ、今の俺の姿形は紛れもなく女なのだった。もし俺が第三者の立場で、女同士二人つるんで歩いている姿を見たら、普通それはデートじゃなくて、ただの友人同士が遊んでいるだけだと思うだろう。それが普通であって、俺の心がどれだけ緊張の余りに高鳴ろうと、どぎまぎしよう、誰もそれに気づいてくれないことは仕方がないのだ。そんな俺の何ともいえぬ気持ちを察してくれているはずのパートナーたる小動物は、さっきからずっと俺の左ポケットの中で静かに眠っているしな。あ、そうそう。それと、鷹司のほうも、別にレズの趣味があるわけじゃない、至って普通の女子であり、女である俺に心をとめかしたりするようなことはないようだった。まあ、そのほうが俺も気楽だからいいんだけどよ。

そんなことを考えながら、なんとなく歩いていると、途中、何度

もナンパされたりした。耳にピアス、頭を金色に染めた、ありがちな不良のあんちゃんたちを見るたび、俺はうんざりとした。

「ねえ、ちよっとお茶しない？」

なんか古めかしい口説き文句だが、

「しない」

俺はいつもきっぱりと断ることにしている。何が楽しくて、初対面の男とお茶をしなければいかんのだ。

「そんな釣れないこと言わないでさ。そっちの娘もどう？」

鷹司のほうに目をやって、そいつらは下品な視線を彼女に浴びせた。ニタニタとうすら笑いを浮かべるこいつらを見ていると、俺の我慢はみるみるうちに限界寸前に達しようとしていた。俺はこういうちゃらちゃらした男が大っ嫌いなのだ。かといって、鷹司の目の前で目立つ能力を発動するわけにもいかないしなあ……、なんてひとしきり考え、ふとよいことを思いついたので、俺はぼんと手を叩いた。そして、

「君たちは今すぐ家に帰りたくなる」

と、言った。目を閉じ、吐き出す言葉に力を込める。

「そして、君たちはすぐに自分の人生を考え直したくなる」

さらに続ける。

「考え直したら、すぐに髪の毛を元に戻し、ピアスを外して学校に行きたくなる」

そこまで言って、俺はようやく口を止めた。すると……。

「俺たちは今すぐ家に帰りたくなる」

「そして人生を考え直したくなる」

「髪の毛を戻して、ピアスを外して、学校に行きたくなる」

立て続けに、彼らはオウム返しのように答えてきた。そして、俺が合図すると、そいつらは逃げ出すように俺たちの前から消えてしまった。

「ねえ、あれ、どうやったの？」

喫茶店に入った俺たちは、窓際の席でコーヒーなど飲んでいる。おもむろに鷹司亜子が不思議そうな顔をして尋ねてきたので、

「あれ？ 俺……、わ、私の特殊スキル」

と、答えておいた。こういうときは無駄な言い訳はせず、真面目に答えてやるのが一番なのさ。どうせ理解できないんだから。真面目顔で、とんでも話をしてやったら、それが真実だとしても、普通の人は絶対信じない。

「特殊スキルってなに？」

やはり鷹司は笑っている。信じていない証拠だ。

「特殊能力だよ」

俺は平然と答えてやる。無論、その後で、舌を出し、笑うことも忘れない。嘘だよって証だ！ 本当は嘘じゃないけどね。

しばらくコーヒーを飲んで、ぐだぐだと時間を潰すと、俺たちは今度は映画館に向かって、今はやりのアクション映画を見た。ありがちな、ド派手なアクション物に過ぎないのだろうと思ってみると、これがなかなか、見事な出来で、俺など、要所要所でしきりにガッツポーズをとったり、「よしッ！」と叫んだり、興奮の余り、今更ながらに振り返ってみると随分恥ずかしい真似をしていた。元々、昔からアクション映画は好きだったのだけれど、その思いの念をますます強くしたね。

そんな俺の様に、少しばかり驚いたのだろう。鷹司は帰り際にこう言った。

「なんか、イチさんって男の子っぽいよね」
「げげげッ！」

まじかよ。俺、疑われてる？

「でも、かっこよくていいな。キレイカッコいい、みたいな？」
「キレイカッコいい？ なんだそりゃ？」

いや、とにかく別に疑われてはいないようだ。カッコいい、って
ニユアンスが微妙だが、まあ疑われていないならいいだろう。男の
子っぱい女の子なら、まだ組織も許してくれるだろう。もし、これ
が女の子じゃなくて男の子って事実が判明したりしたら、報酬がパ
アアだからな。

とはいえ、これからはもっと気をつけねばなるまい。これ以上男
の子っぱいよね、なんて思われ続けたら、いずれ俺〓男ってことが
判明してしまうきっかけになるかもしれない。

第4話 ニックネームはイチさん（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第5話 深まる謎

五月になった。

俺の今の立場は、組織を代表する最強能力者でも、非情なる暗殺者でも、頼もしきボディガードでもなかった。そして男ですらない。光洋女学園1年C組に属する、一介の女子高生。

そうさ。今の俺はただの高校生。そしてただの女なのだ。

壮大な校門（通称南門、正式名称朱雀門）を潜り抜けると、職員用駐車場があつて、既に無数の車が所狭しと並べられていた。そして、その向こう側に四つばかり、どでかい棟が立ち並んでいる。そのうち、校門から見て右側から一号棟、二号棟、三号棟、四号棟と名付けられており、どれも三階建て構造となっていた。ちなみに一号棟には事務室、保健室、職員用仮眠室、給湯室、大職員室、校長室、理事長室、来賓室及び昇降口などがあり、二号棟には一年生のクラスが軒を連ね、また二年生のクラスが半分ほど入居している。三号棟には残りの二年生のクラスと三年生のクラスが並び、四号棟は音楽室、美術室、書道室、視聴覚室、茶室、図工室、科学室、図書室など実務科目向けの教室と三年生担当職員室で構成されていた。また四つの棟よりさらに先へ進むとだだっ広い運動場が広がっており、その右側に体育館、左側にはどでかいプールがあつた。

とまあ、そんな学校。

寮を出た俺はいつものように淡々と校門をくぐって昇降口に入ると、靴を脱いで、学校指定の上履きに履き替えた。そして二号棟一階にある1年C組に向かうのだ。

ガラガラと引き戸のような扉をあけると、そこに俺のクラスがあ

る。

相変わらずクラスの中は女ばかりだ。ま、女子高なんだから当たり前なんだけどね。それこそ、うんざりするほど男っ気のないクラスである。そんなところだから、女の子の中で、男の子っぽい性格を併せ持ったボーイッシュな人たちは、まるで若手イケメン俳優のようにモテモテだったりした。そして、俺もまたその一人であつたりして……。

「あ、イチさんよ！」

と、俺が入るなり、皆が騒ぎ出して、周りを取り囲んでくるのだつた。これじゃ、まさしくどこぞのアイドルスターが、自分の通う学校に凱旋登校したような感じじゃないか。

「ねえ、ねえ、イチさん。後で野球のやり方教えてよ」

一人の女子が、興奮の色を隠しきれぬような顔をして、そう叫んでいた。

「わ、わかった」

俺はとりあえず頷いておく。

ハア。

なんで、こんなことになつちまつたんだろう。周りできやいきやい騒いでいる女たちを見つめながら、俺は静かに溜息を吐いた。

よくよく考えてみたら……、いや考えるまでもなく、この前の体育の授業で、やたらとカッコいいところを見せたのがいけなかったのだ。何しろ、ドッジボールをやれば、たった一人で敵チームを壊滅させたし、野球をやれば、打席に立てばホームラン、守備に回ればファインプレーの連発。ピッチャーやったら、皆三振してだーれも打てなかったな。サッカーやったらハットトリックどころの騒ぎじゃなくて、五点ぐらい連続で入れた。

そんな具合なので、俺はいつしか彼女たちのヒーローのような存在になつちまつた。そこまでなら、まあいい。しかし毎日毎日「イチさん」と黄色い歓声を浴びるのは、ちよつと恥ずかしい。

とはいえ、女の子にちやほやされるってのは悪くない。女として

過ごす日々についてのか慣れてきた俺だったが、まだまだ男の本能は失っていないようだ。少し安心する。まあ、非常に奥手の俺は、彼女たちとともに話すこともできないんだけど……。でも彼女たちのにはその寡黙さが逆にいいらしく、「カッコいいー」とか言ってはきやいきやい騒いでいる。

しかしだ。彼女たちは俺の正体が男だなんて夢にも思っていないだろう。っていうか、俺の正体を知ったら、彼女たちは発狂して俺は無残に袋叩きにされるに違いない。だから絶対にばれるわけにはいかないのだ。俺はカッコいい男のような女で通す。それしか生き残る道はない！

「なにやってんの？」

三条が俺の後ろの席からぎろりと、殺気のこもった視線を送ってきた。

「い、いや、別に？」

って、なんで俺はこんな卑屈な態度をとっているんだ？ 別にどんな女子と仲良くしようが、俺の勝手だろう。こいつは俺の目付役であって、恋人でも何でもないんだからな。いちいちこいつの了解をとる必要性はない。

「いいい。あんたには使命があるのよ。男女間の不純交友は、深みにはまると、仕事に差し支えるわ」

何言っただ。俺がそんなへマするわけねえだろ。

「どうだかね。男なんて、皆、女の子にへらへらして、絶対腑抜けになっちゃうんだからね」

ちょっと待て！ 男なんて、って公然と喋るなよ。俺の正体がバレたらどーすんだ。

「あッ！」

俺の指摘を受けて、三条も己の不始末に気がついたようであった。幸い、誰も気づいていないようだったので、フウと静かにため息を

吐く。

すると。

「三条さんとイチさんって仲いいんですね」

そこに、俺の隣に腰を下ろしていた鷹司亜子が声をかけてきた。

「え、あ、まあ。お、幼馴染？　ってか腐れ縁？」

しどろもどろになりながらも必死に答える俺に、

「そ、そうよ！」

と、返す三条だった。

「それはそうと、あなたがこの前倒したおっさんだけだね。彼、どうもあの戦いのこと、覚えてないみたい」

覚えてない？　なんでだ？

「記憶でもなくしたのか？」

と、尋ねてみると、三条はぶんぶんと首を横に振った。

「そうじゃなくて、何だろう。元から、あの事件のことを記憶してなかったっていうか、要するに、何者かが彼を操っていたみたいなの。そんな痕跡が残ってるって、組織は言ってる」

「操られていた？」

なんか妙な話になってきたな。そういえばあのおっさん、随分と異常な力をもっていたものな。外見に似合わぬ……。

「それと、あんたが言ったように、自分が持つてる力以上の力を出してみたい。彼も能力者のはしくれんだけど、レベルはE」

「Eだって？」

やっぱりか、と、俺は思う。

ちなみに俺のレベルはSS+だ。ダブルエスプラス 最上級がSSSで、俺はその一

歩手前。その一歩手前つてのが気に入らないんだけど、まあSSSクラスの奴は今のところ一人もないみたいだから、俺が最強つてことに変わりはないんだけどな。ちなみに三条はA+。エープラス

Eランクつてのは非常に下で、要するに、とりあえず人とは違う

特殊能力を使えるけど、基本的に一般人と変わらないって意味だ。そして、そんな奴が、SS+の俺と互角近い攻防を演じたのだから、そりゃ誰だって変だと思うだろう。それに、彼を退治するべく組織が送り込んだBクラスの能力者たちも片っ端からなぎ倒していたかな。

「彼の体にもかなり負担がかかってたらしく、医者たちが言うには、一週間は療養が必要なんだってさ」

そりゃ、そうだろう。能力者って言うても、Eランクの奴が、いきなりSランクの力を使ったら、体だって壊れるだろ。ま、俺だって人のこと言えた義理じゃないけど。UMT使わなきゃ、俺のランクはFランクだ。要するに最下位。しかしUMTを使いこなすことでSS+まで能力を跳ね上げている。そりゃ、苦労したさ。はじめのうちは全能力を制御できなくて困ったよ。けど、努力の末に使いこなすことに成功したのさ。今じゃ、れっきとした最強Sランク能力者。

「でもさ、誰かに操られてたってお前は言ったださ、じゃあ、その傀儡師はいつたい何のためにそんなことをしたんだ？」

ふと思いついた疑問を、なんとなくぶつけてみる。すると、

「さあ。ただ、私たちの学校の幹部を狙ってたんじゃない？ うちの学校って組織の直営だから、学校幹部の多くは組織の幹部が兼任しているし」

と答える三条であった。

「なるほどね。……ま、俺には関係ないけど、なんか分かったら教えてくれよ。ちょっと面白そうだからさ」

と言って、俺は席からすっと立ち上がった。

「どこ行くの？」

三条が尋ねると、

「仕事さ」

俺はにつこりとほほ笑んだ。

ゴールドデンウィークを間近に控えたある日。

御淑やかな女性になるべく、自らの席にて大人しく腰を下ろしていた俺の下に、世界史担当教諭で、何を隠そう俺のクラスの担任でもあるカール・タナカ教諭がやってきた。

日系三世。六年前に日本国籍を取得して帰化した法律上日本人でもあるこの男は、今年で二十五歳になるのだという。端正な顔立ちから女子たちに人気のある先生で、俺もまあ、嫌いじゃなかった。「イチ君、ちよつと話がある」

流暢な日本語でそう言う先生に、俺は何の気なしについていった。話とは果たして何だろう。成績が悪かったかな？生活面でなんか変なことあったかな？なんていろいろ頭を働かせていると、俺は周りから飛び込んでくる言いようのない殺気……、もとい嫉視に驚いて、肩を縮めた。

なに、あの子。先生と一緒に歩いてるなんて！

あの子、先生と付き合ってるのかしら？

なんてわけのわからん言葉が俺の耳に届いてくるわけだ。んなわけねえだろ。と突っ込みたくなる気持ちを必死になって抑えながら、俺は逃げるように先生の後ろに従者のようについていった。

すると……。

ついたのは小さな部屋。誰もいない一室。表札には来賓室と記されていたような。おそらく来賓か何かを待たせておく部屋なのだろう。その証拠に随分と立派なソファとテーブルがどんと置いてあった。

こんな部屋があつたのかと、純粹に驚く俺を尻目に、先生はソファの上に我が物顔でふんぞり返った。

「座りたまえ！」

相変わらず、偉そうな態度である。まあ、そんなことは入学当初から分かり切っていたことだったが、改めて認識する。こいつは何か勘違いしている。教師つてのは、そんなに社会的地位の高い仕事だったか？ 例えそうだとしても、教え子であり、かつお客でもある生徒を前にこんなに偉そうにふんぞり返るやつがあるか！

「イチ君。君に話があるのだ」

分かつてる。だから着いてきたんだ。早く言え。俺はまどろっこしい言い方が大嫌いなのだ。あ、それとだ。イチ君つてなんだよ。先生までも俺をイチと呼ぶのか？ 全く、鷹司にも困ったものだ。あいつが俺のことを「イチさん」「イチさん」と呼ぶものだから、皆が揃ってイチ、イチ、イチだ。中には「イチちゃん」と言うのを略して「イツちゃん」とか、さらには「イチたん」なんてわけのわからん呼び方で呼ぶ奴まで現れ出る始末だった。たん、つてなんだよ、たんつて……。なんて突っ込みに答えてくれる奴は当然いない俺の正体を知っている三条からして、これ見よがしに「イチたん」なんて呼んでくる始末だからな！

それはともかく、俺は先生に言われるまま席に腰を下ろした。

「用件はなんですかあ？」

できる限り可愛い女の子っぽく喋ってみた。ちょっとやりすぎたかな？ しかし先生は気にしない。彼はおもむろにすくと立ち上がると、窓際のほうへと歩いていった。その少しばかり大きめの背中に、何ともいえぬ威圧感が漂っている感じがした。

「用件。……まあ、要件があるから、君を呼び出したんだが」

昼の日差しが何ともいえずまぶしい。彼が落ち着きなくブラインドを開けたり閉じたりしているので、その瞬間に飛び込んでくる光が俺の目にあたるのだった。

すると、先生が振り返った。その真剣な眼差しが、少し怖い。ま、まさか！

俺は少し恐怖する。よ、よもやこのシチュエーションは……。昼下がりの学校。若い教師と女子生徒が二人つきり！ よ、よもや？ こ、こいつ、俺に……。俺を襲う気じゃあるまいな。あるいは告白とか？ 待て待て待て！ 俺にはそんな趣味はない。俺は男だぞ……。って今は女だったあ。

と、必死に焦っている、先生は俺の側に歩み寄ってきた。
やばい、やばい、やばい、やばい。

どーしたら、ここから逃げられるだろう。いつそこいつを張り倒すか？ 俺の能力を駆使すれば、こいつの記憶ぐらい吹っ飛ばせる。ただ、記憶消去の術は余り得意じゃないので、下手したら、あらゆる記憶を吹っ飛ばしてしまう危険性もあるので、あんまり使いたくないが……。

すると、先生はこう言った。

「話と言うのは、君の力のことだがね」

力？ なんのことだ。

俺はきょとんと、先生の眼をじっと見つめた。

「君、能力者だろう」

「……ハア？ の、能力者ってなんですか？」

俺は精一杯、しらを切ってみる。ってか、なんでこいつが俺を能力者だって知ってんだ？ 俺が能力者であるという事実は、俺の正体が男であるってことより極秘事項のはずだ。

能力者は、自らが持つ特殊能力を一般人にばらしてはならぬ。あるいは知られてもならない。

というのが能力者たちを一元管理している組織の基本方針。もしも知られたりしたら、その瞬間、おもーい制裁処分が待っている。この前、友人に自分の正体がばれちまった能力者は、確か禁固一年

の刑を受けたつけな（ついでに罰金刑一千万円）。無論、その友人
つてのには記憶消去の術がかけられて、超能力なんてものが存在す
ることを忘れちゃったようだけど。

「案ずることはない。私も君と同じ、能力者だよ」

と言つて、彼はそのポケットから一匹のシマリスをとりだした。

「彼が僕の相棒さ。^{パートナー}名前は……」

彼がそう言おうとした時、シマリスは素早い仕草で彼の口をその
体で塞ぎ、

「わが名はコーメイと申す。以後、お見知りおきを」

と、何やら重苦しい、昔風な物言いで名乗りだした。

「コーメイ？」

俺が問い返すと、

「そう。諸葛孔明からとった。本来なら、僕の名も劉備玄徳に改名
してもよかったのだが、それはまずいと周囲に止められてしまつて
ね。ははは」

そう言つてからからと笑うカール・タナカ教諭であつた。

ま、それが妥当だと思うね。アメリカの血筋を多分に遺したよう
な顔立ちをしている男が、我こそは劉備玄徳なありい、なんて言わ
れても実感は湧かん。俺の中にある劉備玄徳像にもひびが入るから、
是非やめてもらいたい。

「それで、その能力者様がいつたい、このバカ主に何の用だい？」

すると、俺に代わつてそう答えたのは、俺の従者たるラン^{パートナー}だつた。
彼は俺の左ポケットからぬくぬくと姿を現して、肩の上にちょこん
と座りこんだ。

「それが君のパートナーかい？」

先生が尋ねると、「そうさ」と俺は答えてやつた。

「俺っちの名はラン！ よろしく」

ランは「ははは」と笑つて、シマリス型パートナーのコーメイと
かいふ小動物を睨みつけた。

「んで、何の用だよ？」

今度は俺が問う。実際、こんな無駄話をしている暇はないんだ。こんな狭い部屋で、こいつと長い間二人っきりで過ごしたりしたら、後で何を言われるか知れたものじゃない。生命の危機を感じるね。だからできればとっとと本題に入り、手短に終わらせてほしい。

「承知した」

先生はそう言うてにこりと笑う。そして、

「といつても、別に既に用件はすんだから、もう帰つてもいいよ」と、言いながら彼は再びソファアの上に腰を下ろした。

「って、ちよつと待て！ 用件はもう済んだ？ ということは、要件つてのは……」。

「そう。自己紹介だよ。さすがに人が多い教室で自己紹介するわけにもいかんだろう。あ、そうだ。付け加えておこなら、私も二年前に組織に派遣されて、極秘裏に内通者のことを調査しているんだ。要するに君たちと同じだね」

俺たちと同じ。たちってなんだよ。ここで極秘調査をしているのは俺だけじゃないのか。……ああ、そう言うことが。目付役の三条も頭数に加えちまつてゐるわけね。

「いや、違う」

先生はきつぱりと言い切つて、

「君のほかにも同時期に少なくとも五人の能力者がこの学校に潜入している。君と三条君を加えれば七人ということになるね。君と同じく新入生という立場で入ってきた人もいれば、転校生という形をとっている人もいる。もちろん、私のように教師と言う形で入った人もいるよ」

「俺たちのほかに、ご、五人もいるのか？」

「少なくとも五人だ。僕が把握している数が五人というだけさ」

そう言い直す先生を、俺はじとつと睨みつけた。

ひとしきり話も終わつたようなので、俺は静かに立ち上がり、一

礼して退席した。

ま、潜入している能力者が俺たちを含めて七人だろうと、だから何だっただ。俺はこの仕事をやりきって報酬をもらう。それだけだ。もし、その能力者たちが俺の仕事を邪魔するようなら、叩き潰してやるのみさ。俺に立ち向かって勝てる奴なんて、この世にはいないんだから。

だから俺は立ち上がり、一礼して立ち去ろうとしたのだ。

いや、しようとした、と言い直すべきだろう。立ち上がった一礼した俺に対して、カール・タナカ先生はおもむろにこう言った。

「そういえば、君はUMTの使い手のことを知っているかね？」

どきッ！ 俺の心は確かにそんな悲鳴を上げた。

UMTの使い手……、って俺のことじゃん。別に俺がUMTの使い手であることを隠しているわけじゃないけれど、しかしだ。こいつの言葉のニュアンスからは余りよくない雰囲気を感じられてならん。

「べ、別に知りませんけど……」

とりあえずしらを切っておく。疑われたら、疑われたでいい。そんなときは白状するだけさ。

「そうか。UMTの使い手は青年と聞いている。そして、この学校に潜入したとも聞いている。まあ、女子高である以上、男子が入り込める余地は限られている。教員か、あるいは事務員か。そのあたりを調べれば見当はつくだろうけど、もし、何か知ったら是非僕に教えてくれ」

「え、ええ。べ、別にいいですけど」

俺がそのUMTの使い手だよん、とは言わない。言いたくない。とにかく、こいつはUMTの使い手、要するに俺の得意技が『外見偽装』であることを知らないようだ。

しかし、なんでこいつは俺のことを聞きたいんだ？ UMTに興味でもあるのか？ まあ、そりゃ普通、能力者のレベルを極限まで高めることができる宝具のことなら、興味を抱くのも普通かもしれ

ないが……。

しかし俺はなんとなく不吉な予感を察知して、そそくさと逃げようにタナカ先生の元より立ち去った。後で三条にも口止めしておこう。もしタナカに何か聞かれても、絶対に答えるな、と。

第5話 深まる謎（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第6話 新たな任務

ゴールデンウィークになった。

今年は休みがうまい具合に重なって、五連休になったのだという。とはいっても、別にこれと言ってやることもないので（休日仕事をする気もないしね）、俺は鷹司亜子に連れられて、彼女の実家を訪ねることにしたのだった。もちろん、三条もいっしょである。「で、でっかい！」

それが、俺と三条が真っ先に漏らした一言。ありえないくらいの大宮殿。

こんなものが、この世に存在するのか、って言いたくなるぐらいの御城だった。これに匹敵するものといったら、ルイ太陽王のベルサイユ宮殿か、イギリスのバッキンガム宮殿、あるいは江戸城？

いやあ、とにかく、全てが全て滅茶苦茶大きかった。

「私の家、財閥やってるんだ」

鷹司は淡々と言って、にっこりとほほ笑んだ。

そして、彼女は荘厳な城門にとりつけられたベルを鳴らす。そして、

「私。亜子です」

彼女がそう言うのと、城門はガガとけたたましい音を張り上げて、ゆっくりと開いた。

庭もまた凄まじいの一言に尽きた。

噴き出す噴水に、整えられた緑色がよく映える。

いやはや、鷹司亜子が財閥令嬢だったとは驚いたね。名字が鷹司っていうだけあって、さすがだ。

ちなみに鷹司グループというのは、元々彼女の祖父が始めた消費者金融会社に端を発しているらしく、以後消費者金融だけじゃなく

て、銀行や証券、あるいは保険などに進出して総合金融業へと多角化し、さらに建設、不動産、流通、運輸、電機、娯楽等々、本業とはあまり関係性のない分野にも勢力を広げることで、強大な総合財閥になったのだという。

ま、そんなことはどうだっていい。要するに、鷹司の実家が、稀に見る大富豪だったってことを留意しておけばよいのだ。

んでもって、俺と三条は相変わらず呆然とした顔のまま、鷹司亜子に伴われて、荘厳な宮殿の中に足を踏み入れたのだった。

執事とかメイドとか、まあいろいろいる。

彼らは俺たちが通るや否や、一斉に、

「亜子お嬢様！ お帰りなさいませ」

と叫んで、仰々しく頭を下げるのだ。

何とも馴れない空間だった。異世界に迷い込んだような錯覚を覚える。そりゃ、俺だって、これまでに様々な要人を護衛してきたりしたから、大金持ちって呼ばれる人には多く会ってきた。しかし、ここまでの大金持ちには未だかつて会ったことがない。

「あ、ごめんなさい。大げさな出迎えはしないでって言うてあったのに、執事長辺りが勝手に……」

鷹司は恥ずかしそうに頭を掻いている。その仕草が、またたまらなく可愛らしい。

「何変な目で見てんのよ」

俺のそんな視線を肌で感じたのか、三条が咎めるような声を吐いて、俺の脇を小突いてきた。

「う、うるさいな。別に変な目なんてしてねえよ」

声が裏返っていないかと、俺は少しばかり焦った。三条は相変わらずじとつと俺の方を睨んできたが、

「どうかした？」

鷹司が不思議そうな顔をして俺たちを見つめてきたので、三条は

俺に対しては何も言わず、ただ「なんでもないわよ」と言っていた。

彼女の部屋もまたなかなか素晴らしく、そのバルコニーからは、壮大な庭が一望できるようになっていた。

いやはや、ここまで来ると、もう感嘆のため息を漏らすより他に仕方がない。

「こ、こんな御金持だったんだ……」

俺がそう言つと、

「う、うん」

何やら恥ずかしそうに顔を赤らめて、俯きながら頷く鷹司亜子であつた。

可愛い！

俺は率直にそう思う。

「それで、今日は私たちを何で招待してくれたの？」

三条が単刀直入に尋ねた。

「あ、それね。……なんか、お父様があなたたちに興味を持ったらしくて、あなたたちを招待したのは、お父様なんです」

お父様？ その品のある物言いに俺は何となくたじろいだ。

「でも、お父様はまだ帰っておられないので、それまでは私がもてなすよう命じられています」

「……そ、そう」

三条もまた驚きを隠せぬような顔をして、きょとんと立ち尽くしている。

いやはや、ここまでお嬢様だったとは……。俺と三条は「ははは」と苦笑いを漏らしつつ、側にあったソファアにごろりと寝転がった。

その『お父様』が御帰還したというので、俺たちは早速、その御父君のおわす書斎に通された。

書斎と一言で言っても、普通の書斎とは全く違う感じがした。何しろ滅茶苦茶広いのだ。その上、父君の趣味だという十分の一スケールの鉄道模型が所狭しと並べられていた。書斎＝仕事をする部屋だと思い込んでいた俺にとっては、とても書斎とは思えぬ部屋であった。

「お、来たかね」

如何にも御偉方といった感じの物言いに、俺は少々戸惑った。何やら上司に会いに来たような感じがする。

「亜子。お前は下がりなさい。私はこの二人と話がある」

父君の仰せに、鷹司は恭しく頭を下げて、素直に引き下がった。そして、父君は俺たちの方に振り向き、

「ここだとんだから、こっちに来たまえ」

と言つて、おもむろに近くの本棚のほうへと歩み寄った。
すると……。

父君が本棚に並べられた本を、適当に引っこ抜いたり入れ直したりすると、突然ガガガという音を張り上げて、それはゆっくりと動き出した。

そこには小さくも薄暗い階段があった。

「入りましたえ！」

父君はそう言つて、俺たちを案内した。それに従い、俺たちは通路を降りる。そしてしばらくすると、やたらめつたらどこかい部屋が広がっていた。

「ここはな、我が家の中で私以外は誰も知らない秘密の部屋なのだよ。そして、能力者の特訓場も兼ねている」

「の、能力者の特訓場？」

俺に代わつて三条が驚いている。無論、俺だって驚いているけれどね。特訓場？ というより、なぜこの偉そうな御父君は、俺たちが能力者だつてことを知っている。超能力が存在していることを知

っているのだ。

「ふふふ。それはね、私が組織のパトロンの一人だからだよ」

パトロン？ ああ、そんなような人たちがいるってことを聞いたことがあるような気はする。この御父君は巨大財閥の総帥なのだから、パトロンとなるだけの金は腐るくらい持っているだろう。

「私の名は鷹司金成と言う。肩書きは鷹司ホールディングス代表取締役会長兼最高経営責任者（CEO）。そして、組織の最高評議会名誉顧問団団長も兼ねている」

え、えーと。鷹司ホールディングス（要するに鷹司グループの持ち株会社）の会長さんで、組織の名誉顧問団団長？ ま、まあ、なんだっていいよ。

彼からもらった名刺に記された長つたらしい肩書きを眺めながら、俺はハアとため息を吐いた。要するに名士なんだろう。それだけ分かれば十分だ。

「君たちをここに呼んだのは、他でもない。イチ君。君が、SS+級の能力者だということを小耳に挟んだんでね。ついでにわが娘のルームメイトというじゃないか。一つ挨拶も兼ねて、ここに呼んだのだよ」

と、その会長様は言った。

って、この会長様までも、俺をイチ君と呼ぶのですか。……まあ、今さらって感じがしないでもないけどね。イチ君だろうとイチさんだろうと、イチちゃんだろうとイチたんだろうと、もうどうだっていいよ。

「それとね。ついでにわが娘のボディガードも兼ねてほしいんだ」
会長様は、俺の目をぎろりと睨みつけた。そして、この会長も俺が『外見偽装』の使い手であることまでは知らないようだった。もし、娘のルームメイトの本性が男だ、なんて知ったら、この人はどういう顔をするだろう。怒るかな？ そりゃ、怒るだろう。年頃の娘が、年頃の男と一つ屋根の下で暮らしてるって分かったら、普通の親だったら怒るに違いない。

「ぼ、ボディガードですかあ」

だから俺は努めて女つぱく喋ってみた。

「そう。ボディガードだ。何しろ、あの娘は何かと狙われやすい立場にあるからね」

「……狙われやすい立場？」

そついや、初めて出会ったときも、チンピラのような奴らに襲われていたような。

「何で彼女が狙われやすい立場にあるんですか？　可愛いから、とかそういう話じゃないですよ」

俺に代わってそう尋ねる三条に、

「可愛いとかそういう問題ではないのだよ。あの娘には、特殊能力があるのだ」

「……特殊能力？」

俺と三条の声が見事にはもった。いや、それだけじゃないな。俺と三条に加えて、俺の肩の上でふんぞり返っている我が従者のランと、三条の従者たるフェレットのシーザーの声が同時にはもっていた。

「そうだ。あの娘には特殊能力が宿っているらしいのだ。それが何なのか、私にもよくわからんがね。ただ、組織の幹部たちが言うには、あの娘の持つ力は、かなり凄まじいものらしい。ま、あの娘は何にも知らないし、私はあの娘に真実を知らせるつもりもない。あの娘には普通に育ってもらい、そして、いずれは真面目な人と普通に結婚してもらいたいと考えている。無論、あの娘が嫌と言え、財閥もあの娘に引き継がせるようなことはしないつもりだ」

なるほど。その力を欲している何者かにその身を狙われるかもしれない、ということか。だから最強能力者と評判の高い俺に警護を任せたいのだろう。そりゃまあ、下手なSPを何百人とつけるより、俺と三条を護衛に回した方が明らかに効率がいい。俺には何十人と言う要人を守り切ってきた経験と実績があるしな。

「無論、報酬は支払うよ。そうだな。月辺り五十万円でどうかね？」

会長様は、その右手の平に付いている五本の指を全部突き立てて、俺たちの前に突き出した。

「あ、そうそう。組織上層部の許可は得てあるから、心配はしないでくれ。組織の御偉方も、あの娘は守りたいと考えているようだしね。特に、分離主義者どもの手に渡るようなことがあってはならないと思っていろいろらしい」

そう言つて、会長様はおもむろに煙草を取り出し、火を付けた。ぷかぷかと煙を吐きながら、困つたようにハアとため息を漏らしている。

「全く、分離主義者たちにも困つたものだよ。奴らはあの学校にも多数のエージェントを送り込んで、組織の秘密を探っているようだ。あの学校は、わが組織の重要な秘密基地でもあるからね。ま、滅多なことで、組織の中枢情報に接することはできないと思うが、万一、奴らが我らの極秘情報を知つたら、えらいことになる」

巨大財閥の総帥で、組織の最高首脳に列している名士でも、こういう顔をするんだなと思わずにはいられぬほど、会長様は憂鬱な表情を浮かべてぼやいていた。

会長様の部屋を出た俺たちは、鷹司亜子の部屋に戻った。

彼女は退屈そうな顔をして、どでかい液晶テレビと格闘していた。それはおそらく今はやりの体感ゲームという奴なんだろう。白いボードの上で、フルフル腰を振っている彼女を見て、

「う、ごめん！」

俺はすかさず謝った。

どうやらフラフラをやっていたようだ。彼女は恥ずかしそうに蹲り、あたふたと流れ出る汗をタオルでぬぐった。

「で、お話は終わったの？」

ふと、彼女がそう切り出すと、俺は「まあね」と頷く。

「そう」

彼女は何やら深刻そうな顔をして、それを覆い隠すように、にっこりとほほ笑んだ。ま、とにかく用は済んだし、このまま帰ってもいいんだろうけど、どうせ家に戻ってもやることはないしな。彼女を守ることが新たな任務に加わった以上、彼女の側に控えているのが、この際一番いいんだろう。

だから俺は、その体感ゲームとやらに飛び乗ると、ランニングという選択肢があったので、それを選んでやり始めた。

第6話 新たな任務（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第7話 模擬決戦

ズドオオオン。
ダダダダダン。
バババババン。

けたたましい轟音が響き渡る世界で、俺はハア、ハアと荒い息を吐いていた。

ってか、こいつめっちゃ強え。この俺が、俺の息が上がってる……。

「おい、上だ！」

ランが怒鳴ると、俺はすかさず体を前に転がして、上からの攻撃を辛うじてかわした。

「畜生ッ！」

数多い能力者の中でも、ほんの一握りしかないSランクの中で最上位に位置しているSS+の名に賭けても、俺はこんなところで負けるわけにはいかないのだ。

「くつくく。イチ君。君は確かに良いセンスを持っているし、才能はかなりあるけれど、それに過信しすぎて、防御を怠りすぎだ。私から見ると、隙だらけなんだな」

どこからともなく響き渡る、嘲笑うような声色に、俺はムツと睨みつけるような視線を向けた。

そいつは空にいた。右にも左にも、あちこちに飛び散っている。分かるだけでも、そいつは少なくとも六人は確実にいたのである。そして、そのどれも、全員同じ顔をしていた。

「ありや『幻影人形』^{ファントム}だな」

おもむろにランが説明を始める。

「力を使ってかき集めたエネルギーを使って、己の幻影を何体か作

り出しているにすぎん。本体以外は、いくら壊しても、暖簾に腕押しだぞ」

「わかってる！」

一見するだけなら、本体と幻影の間にある差はほとんどない。幻影に攻撃を仕掛けたところで、全く何の意味はなく、幻影の討伐にかまけていると、本体から奇襲攻撃を受けることにもなる。

俺の戦闘スタイルははっきり言って『攻撃こそ最大の防御』を地で行くものだから、防御が極端に疎かになっているのだった。ゆえに何体もの幻影を使って、俺の攻撃目標を攪乱してくるそのやり方は、俺にとって、極めて相性が悪かった。

「こうなったら」

俺は仕方がないので、体の全身に力を集め始めた。

「なにをするつもりだ？」

ランが、よもやという顔をして尋ねると、

「あたりだ！ ああいう面倒くさい相手を、個別でやりあおうとするから負けるんだ。だったら、全員丸ごと、皆、悉く吹っ飛ばしてやればいいだけのこと」

俺はにやりと笑い、再び力の集中に精神の全てを注いだ。

けれども、まあ、そいつがそんな隙をくれるはずもなく……。

「前方から敵ッ！」

ランが怒鳴ると、俺は軽やかな仕草で、その攻撃をひらりと交わした。

「次は右からだぞ」

間髪いれずに敵の攻撃が続く。

「次は左だ」

「次は上からだ」

「次は下からだ！」

次から次へと、あちこちからエネルギー弾が飛んでくる。そのたびにドオオオオン、ダアアアン、バアアアンとけたたましい轟音を張り上げながら、それらは近くの壁にぶつかってはじけていく。

敵の攻撃を交わしながらも俺はどんどん力をためていつて、十分もすると、MAXに達した。ふと己の体を見ると、それはほんやりと、まるで虹色のように眩く輝いていた。

「先生！ 結界張ったほうがいいですよ」

俺はにつこりとほほ笑み、そして全身に蓄え続けた力を、思い切っ
って解放した。

気がつくと、周囲四方の全てが吹っ飛んでいた。

既に特訓場には、かつての面影がなくなっている。これではただの廃墟である。安全な観客席より様子を見守っていたらしい会長様は、「ははは」と苦笑いしながら、こつちを呆然と見つめていた。

俺はゆつくりと大地に降り立ち、がつくりと崩れ落ちた。さすがに疲れた。これはたまらん。

「全く『大爆発』^{エクスプロージョン}もいいが、少しは力を抑えろ」

ランはじとつと俺を睨んでいる。

「世界が吹っ飛ぶぞ」

彼は、いつになく呆れたような顔をして、ハアとため息を吐いていた。

俺は「ははは」と笑って、周りを見た。確かに、ちょっとやりすぎたかもしれない。もし特別仕様の特訓場でなかったら、それこそ半径五百メートル四方が吹っ飛んでいたかもしれない。ま、あれでもそれなりに力を抑えたつもりんだけど……。

「あれで力を抑えた？ どれだけ？」

ランが疑惑の目を向けるので、

「ま、80%ぐらいは使ったよ」

俺は率直に、淡々と答えてやった。

「80%ねえ。あれで、二割も力を残していたのか」
絶句するランに、俺は苦笑いする。

「いやはや、強いね」

そこに、そいつはやってきた。

満身創痍。

既に戦闘を続行できるような状態ではない。

「先生こそ、お強いですよ」

ぼさぼさになった髪を整え、乱れ切った服を着直しながら、俺は激戦を交えた相手の奮闘ぶりを称えてみることにした。まあ、俺を相手にこれだけ戦えた奴は、まさに久しぶりだったわけで、冷や冷やしたけれど、楽しかった。

「全く、君のその華奢な体のどこからあれだけ強い力が出てくるのか、是非とも知りたいものだ」

世界史担当にして我らが担任、カール・タナカ教諭はからからと笑って、ゆっくりと腰を落とした。

「大爆発のおかげで、私の影たちは、みんな吹っ飛んでしまった。君は確かに防御を疎かにしすぎだが、それに余りある攻撃力を持っているようだね」

ま、故にこそ最強と称えられている俺なのさ。防御なんかは力を回す必要はない。相手が攻撃に出てくる前に、あるいは出てきたって、俺の圧倒的な火力で踏みつぶすだけだ。

「だが、君は少々慢心しすぎだ」
「なんだって？」

「私はそれほど力がある能力者ではない。だが、私の作戦一つで、君は、あれだけの力を発動せざるを得なかった。ゆえにそれだけ疲れているのだろう」

ぐぬぬ。否定はできない。

確かに、こいつの作戦は、攻撃一辺倒の俺を散々苦しめた。結局、俺の最終奥義たる『大爆発』を使わざるを得なくなっちゃった。あれは体の隅から隅に宿る力を悉く使役して発動する技だから、威力ははんばじゃないが、疲れるのだ。それこそ、42・195キロ走

ったばかりのマラソン選手のような状況になるのであった。

「防御を疎かにしているとか、そういう問題ではなく、君は少し、その力に驕りすぎだ。もし次、もし次に私と君が戦うことがあったなら……。無論、こういう戦闘方法が制約される闘技場ではなく、普通の場合で戦うようなことがあったなら、私は君に絶対負けないと宣言することができるだろう」

何を言っている。お前はたった今、俺に負けたじゃないか！ それがいっ流の負け惜しみの台詞なんだとしたら、実に惨めだぞ。

俺が相変わらず勝ち誇ったような顔をして、先生を見つめていると、その先生はにやりと笑って、

「ま、次の戦いを楽しみにしているよ。そのときまでに、君も少々考えを改めておくことだね」

そう言うなり、俺に背を向けて、出口の方へとすたすたと歩いていった。

第7話 模擬決戦（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第8話 浴室大騒動

凄絶な死闘が繰り返された後に残った惨状……、なんてものは、俺にとつちや実に当たり前の世界なわけで、別段これといった感想、感慨を抱くものでもなかった。昔の俺は、それこそ戦争にもよく駆り出されたような気がするし、刺客として、要人暗殺に従事したこともある。あるいは要人護衛の任を与えられた際などは、その要人を襲撃しようとする勢力と交戦状態に陥ることが度々あった。

だから、完全にぶっ壊れた特訓場を見ても、俺は別に驚いたりすることはなかった。けれど、俺の発した『大爆発』^{エクスプロージョン}の結果、こうなつたのだと思うと、少々会長様に申し訳ないような気はした。

「いや、別にかまわんよ」

会長様はそう言つて「ははは」と豪快に笑つた。

「それより面白いものを見せてもらつたから、その見物料としては再建料なんてのは安いものだ」

巨大財閥の総帥「大富豪だからこそ言える台詞に、俺はただ呆氣にとられるだけだった。まあ、とはいえここは素直に謝罪しておくのが筋だと思つたので、

「ごめんなさい」

と、ぺこりと頭を下げた。

とまあ、そんな具合に会長様をやりすごした俺は会長様の部下が運転する車に乗つて、寮まで戻つた。高速を飛ばして、一時間といつたところだろうか。

寮に戻ると、疲れた体をいやすべく、風呂に入つて、湯船に浸かることにした。俺はとりあえず部屋の中に誰もいないことを確認してから、姿を元に戻した。ビリビリと、電気がほとばしるような音を立てながら、少女の輪郭がばやけ、やがて、そこには一人の青年、即ち俺が姿を現した。

風呂までも変装で入るのは嫌だからな。それに、女の姿のまま全

裸になるのは、例えそれが俺の能力なんだとしても、やつぱ恥ずかしい。何しろ、俺の理想的女性像をそのまま具現化した女版俺は、スレンダーな体格な上に、適度な胸の大きさ、白い肌、可愛い顔と、俺のリビドーを直撃するに十分な色気を持っていた。もし、この姿のまま風呂なんかに入ろうものなら……。さて、俺はどうなっちゃうでしょう。

だから俺は本当の姿に戻るのさ。疲れを癒すための風呂でまで、そんな面倒くさいことに頭を働かせたくない。

風呂は気持ちいい。

まさに風呂は人間が文明的生活を送るには欠かせない代物だよ。これを考え出した人間に、俺的ノーベル賞を与えてやるよ。ま、そんな奴がいたのかどうかは知らんし、いたとしても、いったいいつのことだよ、って突っ込みたくなるほど昔の話だろうし……。

なんて考えながら湯船につかっていると、

「ただいまー」

タイミングの悪いことに、鷹司亜子が戻ってきたやつた！

やばい、やばい、やばすぎる！

今の俺は男だぜ。しかも肌身離さず常に持っているはずのUMTを、こう言う時に限って脱衣所に置きっぱなしにしてあった。まあ、UMTは見かけ、ただのちっぽけなペンダントなので、一緒に風呂に持ち込むわけにはいかないんだけど……。

ってか、UMTが手元になかったら、俺はただのF級能力者……、要するに無能力者一步手前みたいな力しか出せないんだぜ。もちろん、『外見偽装』なんて使えるわけない。

「あれー。イチさん、どこー？」

鷹司の甲高い声が聞こえる。

よ、よもや風呂場に入り込んできたりはしまいな。入られたら、即、ジ・エンド！

「あ、お風呂にいるの？」

げげげッ！

来るな、来るな、来るなって！

焦る俺に、非情な鷹司。

彼女は浴室の扉をぽんぽんと叩く。

「イチさん、いるの？」

いるよ、いるから、入ってくるな！

「い、いるよ」

俺は、必死になって答えを返す。……って、待った！ 今、俺の声色、明らかに男物だったよな。『外見偽装』を使わないと、声色も変えられないのだ。

「あ、そう。いるんだ。……でもさ、イチさん、風邪でも引いた？ 声がなんか変だけど」

ほらきたーッ！

俺はますます焦る。

「湯船に長く浸かっていると体に悪いわよー」

だったら早くどいてくれ！ ってか、ラン。パートナーなら援軍に来い。リビングですやすや眠ってる場合じゃねえぞ。ご主人様の大ピンチなんだ。

「あ、そうだ。イチさん、聞いてよお。今日さ、帰る途中にタナカ先生に会ってさあ」

話し始める鷹司に、俺の焦り、怒りはピークに達しつつあった。

「なんかくれたんだよね。ねえ、これなんだと思う？」

そう言って、彼女は浴室の扉を開けようとする。

まてーッ！

待て、待て、待て、待てッ！

勝手に入るな。俺は今、真正正銘、男なんだぞ。こんなところ見られたら、どうなるんだ。

誰か助ける！ マジで助ける。

誰でもいいから、俺を助けてくれ！ 百万円ぐらい払ってやるぞ。

パリーイイン。

突然、どこからともなくお皿が割れるような、甲高い破裂音が響き渡った。

「あれ、台所？」

鷹司が驚いたような顔をして、

「ちよつと見てくるね」

と、言った。

フウウウ。助かったあ。

俺は心の底から安堵のため息を吐く。とりあえず、俺が男だつてばれないですんだ。後は、脱衣場に放置してあるペンダント型宝具『UMT』をとって、俺の得意技その一たる『外見偽装』を発動させないといけない。

ガラガラと開く。

そして誰もいないことを確認すると、素早く飛び出し、俺の服をしまったカゴをがさがさとあさった。ってどこだ？ どこやった。

小さいペンダントだからなあ。服の間に挟まっちゃったかな。くそッ！ こんなことなら、ちゃんと 畳んでおけばよかったーッ！ ま、後悔は先に立たぬもので……。

しばらくガサゴソとあさっていると、あるではないか。紫色に輝く、我が秘宝『UMT』ちゃんか。

俺はそれを首にかけて、フウと静かにため息を吐く。後は力を込めて『外見偽装』を発動させるだけ……。

すると。

「ふう。イチさんのペットさんが、ちよつとおイタして、皿割っちゃったんだって」

そんな風に言いながら、鷹司が戻ってきた。

……。

ばったり出くわす二人。

ばったり目を合わせてしまった二人。

男と女。

至極単純な組み合わせ。

目を白黒させて驚く鷹司。

どうしたらいいかわからん俺。絶望のあまり「終わった」って言葉が脳内にこだましていた俺。

すると……。

ピカアアアア！

突然、閃光が光った。

言っとくが、やったのは俺じゃない。すると、鷹司が力なく倒れた。気絶したらしい。

「早くしろ」

そう言っただけの俺の側に駆け寄ってきたのは、ランだった。

「全く、お前はたわけか。UMTぐらい持って湯船に浸かってろよ。全く、俺っちがいろいろ手助けしてやったのに、結局見つかりやがってよ」

じろりと睨むように俺を見つめるランに、俺は「ははは」と笑った。まあ、仕方ないじゃないか。

「仕方ないじゃねえよ。ま、とりあえず気絶したから、今見た光景は夢だったって思わせるしかない。どうせ、俺もお前さんも、記憶消去の術は得意じゃないんだ。関係ない記憶まで消しちゃったら、彼女に悪いからよ」

なんて言うランに、俺も静かに頷いた。

とりあえず、俺はゆっくりと『外見偽装』を発動し、少女の姿を取り戻した。そして、すっかり冷え切った湯水を拭い、服を着こんで、彼女を布団まで運んでいった。

「あ、あれ？」

目を覚ました。

鷹司はきよろきよろとあたりを見回している。

「わ、私……。あれ、確か、私、脱衣所で……」

そうさ。そこで俺のあられもない本性を見てしまったがために気絶させられたのさ。もちろん、そんな真実を彼女に告げるつもりはない。

「ああ、脱衣所にきて、タナカ先生からなんかもらったって話をしてる最中に倒れちゃってね。だから、私がここまで運んだのよ。重かったわ」

女言葉に注意しつつ、俺はあることないこと、勝手に吹き込んでやった。記憶を消せないなら、新たな記憶で塗りつぶしてしまえばいい。とでも言わんばかりの俺とランの作戦だった。

「え、あ、そうだった。確か、全裸の男の人がいたような……」
「まずい！ 覚えてやがる。」

「ゆ、夢だよ、夢！」

俺は必死だった。

「男なんているわけないじゃん」

俺は付け加える。

「そ、そうだよな」

彼女はそれでもうーんと必死に唸りながら考えている。これじゃあ、本気で記憶消去の術をかけるしかないのかな。と思っていると、彼女の話題が突然変わった。

「そうそう。これが先生に貰ったものなんだけどね」

彼女が差し出したのは、小さな指輪だった。

きらきらと光る指輪。宝石は付いていないが、真正正銘、金でできているようだった。俺に言わせれば、趣味の悪い代物だ。

「って、それを先生からもらったのか？」

あいつはいったい何を考えているんだ？ 生徒に、金製の指輪をプレゼントするなんて……。教師生徒間の不純異性交遊は断じて禁じられているはずだ。

「えへへー。私、先生に気に入られているのかな？」

楽しそうに笑う鷹司に、俺はハアとため息を吐いた。まあ、あの端正な顔立ち、若さ、モデルのような体格なら、女なら誰だって惚れるだろう。実際、わが学校内ではアイドルのような、カルト的人気を誇っている。

「やめといたほうがいいわよ。……先生と生徒の間に変な噂がたつたら、お父さんの会長さんだってお困りになるから」

楽しそうに笑う鷹司を見ると、なんだか無性に腹が立ってきた。しかも、あの負け惜しみ先公からのプレゼントに喜んでいるのだと思うと、尚更だ。

第8話 浴室大騒動（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第9話 市街戦（前編）

その翌日のことだった。

朝起きて、顔を洗って歯を磨き、朝飯を喰らって、服を着替え…

…。

まあ、いつもと変わることなき一日が始まり、そして学校へ通うのだ。寮から学校までは、約五分の距離にある。

そして、相変わらず荘厳な校門をくぐると、俺は足早にクラスへと向かっていった。

「ねえ、イチさんって部活やらないの？」

と言う甲高い声。

ゴールデンウィーク明けの月曜日。

五日ぶりとなる彼女たちの声に、俺はハアとため息を吐いた。

「やらないよ」

そんな暇はねーしな。

「なんでえ？」

可愛らしい声色。俺が最も苦手とするもの。

「なんでって、暇ないしね……」

「え？ 帰宅部なのに、暇ないの？」

あー、ねえよ。暇なんかあるかよ。今日の放課後からは、校長室に潜入しないといけないし、明日は理事長室、明後日は……、なにするか。あ、そうだ。鷹司の親父様、あの偉そうな会長様は、この学校が組織の秘密基地と言っていたから、学校と組織の関連性でも探ってみるかな。ま、組織が秘密基地にするぐらいだから、この平凡なる女学園には、何らかの隠し部屋みたいなものがあるに違いない。さもなくば、何か面白い秘密が隠されているに違いないのだ。

「あ、そうだ。だったらさ、遊びに行かない？ カラオケとか」
暇じゃねーって言ってるだろ。しかし、女というものは、ひとたび興奮し始めると、聞く耳なんてものはものの見事に消えてなくなってしまうようだった。

「ねー、行こうよ！」

なんて言ってくる。で、俺はと言うと、こう言う彼女たちに対して、「嫌」とは言えないのである。

「ね、行こう！」

結局、彼女たちに突っ切られる形で、俺は、今日の放課後の予定……、即ち校長室探索という重要任務を後回しにして、カラオケに行かざるを得ぬ羽目となった。まあ、「わかったよ」と答えたときに、俺の左側脇腹にちくりと痛みが走ったような気がしたけれど、まあ気にするまい。セーラー服左ポケットに住んでいる、わが愛すべき従者様^{パートナ}には、あとで詫びを入れておけばよいさ。

カラオケボックスは近くにあった。

セーラー服姿の数人が、そろそろと群れをなして歩く。俺を加えて、三条や鷹司もいた。計六人。俺たち三人の他は、岡田、前原、長妻と言って、どれもきやぴきやぴの現役女子高生である。

「カラオケなんて久しぶりいい！」

なんて騒いでいるのが岡田。クラス委員長を兼ねている優等生とは思えない態度にいつも驚かされる。

「私は昨日行った」

そう言う前原は生徒会副会長。肩書きと外見、中身が見事なまでに一致した、完全無欠の優等生だ。

「えー！ 前ちゃん、行ったの？ 私も行きたかったあ」

なんて、相も変らぬハイテンションで叫んでいる岡田は、すぐそばで静かに歩いている少女に目をやって、「行った？」と尋ねていた。

「行つてない」

そう静かに答えるのは長妻。クラス副委員長兼書記でもあるこの人は……、極めて普通。若干寡黙な美少女だ。

ともかく、この六人でカラオケ店に入る。店員の指図に従い、部屋に入った。

俺にとっては生まれて初めてのカラオケである。カラオケルームつてのは、結構小さいんだな、とか、こういう風に歌うのか、なんていろいろ思いながら、やがて俺の番になった。

つて、最近の曲はほとんど知らんが……。あ、そうか。鷹司が見ていたテレビ番組にいろいろ曲が流れていたっけな。それなりに耳にも残っているから、まあ、それなりに歌うこともできるだろう。いざとなったら能力を使えば、オペラ歌手より上手く歌えるしな。

あれこれ歌つて、大いに騒いで、散々暴れた挙句に、心身ともにこれでもかつてほど疲れきつて帰る途中のことだった。

現代的なありがちな街並みが広がる世界で、六人釣るんで歩道を歩いている。そこに、

ダアアアアアン。

爆音が轟いた。

「え、な、なに？」

前原が慌てている。岡田はきよろきよろあちこち見まわしている。

長妻は……、なんだか随分と落ち着いてるな。

「爆発？」

周りの人たちも慌てている。

「テロ？」

そう叫んでいる人たちもいた。

すると……。

「な、なんだあれ！」

騒ぎがどんどん大きくなっていく感じがした。

「おい、三条」

俺は隣に控える目付役の女に目を向けた。

「ええ、能力者ね」

見れば、何やら騎士のような格好をした物々しい集団が、のつしのつしと歩いてきた。えーと、みれば五百人ぐらいはいるだろうか。何やらパレードのような感じもするが、車道を堂々と闊歩し、車という車を片っ端からなぎ倒していく彼らを見れば、それが尋常な存在でないことは明らかだった。

「ね、ねえ、あ、あれ、なに？」

鷹司が俺の腕にしがみついてくる。そんな彼女を見て、三条はぶいっとそっぽを向く。

その瞬間……。

鷹司は力を失ったかのようにずりずりと崩れ落ちて、次にはすやすやと眠り始めた。そしてそれは鷹司に限った話ではなく、周囲にいた全員がそうだった。まるで時が止まったかのように静けさを取り戻した町の中には、眠る人々の寝息だけが煩いほど響いていた。

俺は静かに歩きだす。

「三条、鷹司はお前が守ってやれ」

そう言っておくのも忘れない。三条はというと、相変わらずブン怒ったような顔をしていたが、まあ、鷹司を守るというのは、あの会長さんと約束したことでもあるので、

「分かったわよ！」

と、彼女は静かに頷いた。

「あ、そうそう。できれば二十分以内に決めてよね。皆を眠らせら

れるのは、最大二十分だから。それと外部世界とこの町との接続を切っていられるのも、二十分ぐらいだから。もし二十分以上たったら、皆起きだしちゃうし、いろんな人がこの町に入ってくるわよ」
そんな三条の必死な言葉に、俺は「おうよ」と返しておいた。
二十分もありや十分さ！

眠った町に集う軍団。

「エクセルキトウス『幻影軍団』だな」

物知りパートナー、ランの言葉に、

「幻影軍団ってなんだよ」

俺はそう尋ねてみた。

「要はタナカとかいう先生が使ってた幻影人形と同じさ。ただ、あれは人形一体一体がかなりの力を持っていて、幻影だけでも普通に戦えた。だけど幻影軍団の場合は、一人当たりに割く力を大幅に少なくすることで、より多くの幻影を作りだすことができる点に特徴がある。ま、一人当たりに割く力を大幅に少なくしたって言うても、幻影軍団兵士はDランククラスの実力がある。後、幻影人形の場合は、術者そっくりのコピーだが、幻影軍団の兵士たちは、術者が想像する形になる」

だから目の前にいる奴らは中世ヨーロッパ風の騎士の格好をしているのか。しかも五百体も。

Dクラスの能力者が五百体もいるとなると、これは結構大変な作業だ。二十分で片づけられるかな？ そりゃ、まあ『エクスプロージョン大爆発』を使えば一瞬だろうけど、それをやったら、辺りの町まで吹っ飛んじまう。無論、そこらで眠ってる住民たちも傷つけることになる。

要するに今の俺には町を守り、住民を守って、かつ五百体の敵軍を完膚なきまでに叩き潰さなければならぬってわけだ。まあ、術者を倒せば、あいつらも消えるんだろうけど、生憎、術者がどこにいるのかさっぱり分からない。

ガシャーン、ガシャーン、ガシャーン。

甲冑姿の敵軍が進軍を再開する。

彼らは一路、俺の方に向かって歩いてきた。

「どうするよ、相棒」

俺は肩の上にふんぞり返る小さな参謀に声をかけた。

「敵が幻影軍団を使ってきたなら、お前さんも使ってみたらどうだい？」

「俺が？」

「いつも最強最強と言っているお前なら、五百体なんてすぐ出せるだろう。UMTの力を駆使すれば、一千体ぐらい作り上げること
も不可能じゃないと思うが」

ま、まあ、無理じゃないだろうけど。しかし俺はその『エラセルキトゥス幻影軍団』
なんてものを使ったことがない。

「ま、やってみな。とりあえず、複製したい像を思い浮かべて、それをどんどん増やしていくイメージを浮かべていけばいい」

なるほどね。複製したい像を思い浮かべて、それを増やしていくイメージ……。簡単なようで、難しい気もするが、まあ、とりあえずやってみよう。

目を閉じて、うーんと唸る。

すると……。

第9話 市街戦（前編）（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第10話 市街戦（後編）

「ね、ねえ、なにやってんの？」

三条の声が遠くから聞こえる。
知らん。

お前はとりあえず、鷹司を守ってろ！　もしかすると、こいつらの狙いは鷹司かもしれないからな。会長さんが言うには、鷹司にはなんだかわけのわからん力があるんだという。この事態が、それを狙ってる変な奴らの仕業だとしたなら、鷹司が危ない。

とまあ、そんなことを叫びながら、俺は頭の中に、とある映像を思い浮かべて、増えろ、増えろと心の中で唱えていた。目を閉じているから、外界のことなんてさっぱし分からんが、さっきからよきによきって変な音が聞こえるので、まあ術は正確に発動されているに違いない。

とはいえ、ちょっとは気になるので、少し目を開けてみる。

すると、地中からはい出るように、俺の思い浮かべていた映像そのままの幻影が姿を現した。

武士だ。足軽のような格好をした多数の兵卒たちと、荘厳な甲冑を身に付けた武将風の大男が、およそ八対三の割合で、そこかしこ、うじゃうじゃ屯していた。

「よし！　そのイメージを維持したまま、こいつらを使って何をしたいか、頭の中に思い浮かべるッ！」

ランの大声が響く。

何をしたいか……。そんなの、言われるまでもないさ。目の前にいる敵軍を蹴散らすのみ。

行っけーッ！

心の中で思い切り叫んでやると、俺が発動した武士軍団はザッザッザッと整った足音を立てながら進軍を開始した。

武士対騎士。

和对洋。

しかし兵力がまるで違う。何者かが動員したらしい騎士軍は五百だが、こっちは三千。本当は一千体くらい動員できれば御の字かなんて思っていたのだけれど、上限を設定せずに増やしまくった結果、三千にまで膨れ上がったってわけだ。いや、本当はもっと増やせたんだけど、

「やめとけ。多すぎる」

というランの諫言もあって、やむなく俺は三千でとどめておいたのだった。

町全体が、異様な形に歪んでいる。

快晴だったはずの空には、どんよりとした雲のようなものがびっしりと浮かんでいて、全く持って気味悪かった。もちろん太陽の光など届くはずもなく、先ほどまでの明るさが嘘のような薄暗い世界となっていた。

俺は静かにため息を吐く。こんな世界は、もちろん何度も見てきた。ってか、俺だって力を出せば、この程度の世界は作り出せるさ。けど……。やっぱり慣れないよな。

しばらく天を仰いでいた俺は、

「よそ見するな」

というランの声に従う形で、前を見た。

東洋世界を代表する戦士たる武士と西洋世界を代表する戦士たる騎士が、現代的な町の中で激突するという、あり得ない光景が目の前で繰り広げられている。

奇妙といえば、これほど奇妙な話もないだろう。まるで戦国時代の武士たちと、中世ヨーロッパの騎士たちを、この時代、この町にタイムスリップさせて戦わせているようなものだからな。

ちなみに俺は武士たち（幻影だけどね）の総大将だ。これで甲冑と陣羽織でも羽織って、床机に腰掛けていたら、正真正銘の総大将に見えるだろう。もっと厳かな格好をしたら、自ら戦いに出向いてきたお殿様……、みたいに見えるんだろうか。

んでまあ、滅茶苦茶違和感のある合戦そのものは、一言で言ったら、俺の圧勝！　みたいな結果に終わっちまった。案外物足りない気もしたけれど、相手、弱いんだもん。仕方ないじゃん。

けどま、無理もないさ。何しろ兵力的にはこっちのほうが六倍だし、その上、俺の能力キャパシティの方が、敵軍を操っている術者より遥かに強大だったらしく、一体当たりの力がまるで違うのだった。要するに兵力でも兵の質でも、武士軍団のほうが遥かに勝っていたというわけ。

合戦はものの十分で終了した。

凄まじき市街戦も、終わってみれば案外呆気ない。

西洋風の騎士たちを片っ端からなぎ倒したら、そこには術者と思しき一人の男が、ぽつねんと突っ立っていた。

目を真っ赤に腫れあがらせ、けれどその顔色は死人のように青白い。赤と青のコントラストが絶妙に不気味だ。そして、茶色の髪の毛が凄まじいほどに逆立っている。

まるでゾンビのように力なく歩くその男は、一步、また一步と俺の方……、いや、どう見ても鷹司亜子の方に向かって進んでいた。「三条ッ！　あいつの狙いは鷹司だ！」

怒鳴ってみる。三条の方も理解していたようで、薄い白色をした、半透明の結界を張って、ゾンビ男の襲来に備えていた。

ともあれ、俺はそいつに向かって思い切り攻撃を仕掛けた。右腕をそいつに向け、人差指で照準を定める。そして、細長いエネルギー波を放つのだ。

しかし、そいつははらりとかわした。目標を見失ったエネルギー

波は、近くにあった雑居ビルに直撃して、そのビルはものの見事に崩壊した。

ゾンビ男はなおも歩く。生氣など全く持ち合わせていないような、青白い顔をして、のっしのっしと歩くのだ。

「お、おのれ！ 俺を侮るのか」

侮られることが何より嫌いな俺は、逆上の余り、自分でも何をしているのかさっぱり分からぬほどの猛攻を彼に加えた。やたらめつたらエネルギー弾を放って、次から次へと町をぶっ壊した。それでも彼は、まさしくゾンビのように平然としているので、ますます頭に血が上った俺は、能力を使って作り上げた土の剣を手にとると、思い切り襲い掛かった。

まさに鬼、つつつか女夜叉のようだったぜ。

つてのは、ランが語った後日譚。ちなみに逆上しきっていた俺には、その時の記憶が全くないんだけれど……。

ランから教えてもらった内容を整理すると……。いやはや、お恥ずかしいぐらい理性を失っていたようだ。なんせ、ゾンビのようとはいえ普通の人間であるかもしれない奴を、次から次に斬りつけてしまったのだ。まず右腕を切り落とし、次に左腕、ついで左足、右足、左肩、右肩、さらにはお腹に刃先を突き立て、それでもなお前進しようとするゾンビを見て、首まで斬ってしまったようだ。

しかし、頭一つになったゾンビは、なおも前へ進むのだ。このあたりからは、とりあえず記憶がある。片っ端から斬りつけたおかげで、こみあげていた怒りが幾らか鎮静化したからかもしれない。

それはともかく、頭一つになったそいつは、みるみるうちにおぞましい異形へと変身していった。どうやら、最期の力を振り絞って、己の体を再構成しようとしたらしい。結果、再構成に中途半端に失敗したため、みるもおぞましい異形になっちまったようだ。

まあ、俺はそいつの変身を最後まで見なかったので、どういう形

になろうとしていたのかは定かじゃない。ただ、途中経過だけを見て推理するなら……、なんだろう。恐竜？ いや、違うな。有名な特撮映画の巨大怪獣、みたいな格好。まあ、完成形態を見てないので、はつきりは言えないけれど……。

俺は止めを刺そうとした。

右腕にエネルギー弾を蓄え、そいつ……、既に人間ですらなくなつた、ただの化け物に向けた。

「それ以上はやめろ！ もっと威力を弱めるんだ」

と言うランの諫言も虚しく、俺はさらに力を強めて、思い切りエネルギー弾をぶつけた。それこそ細胞一つ残らぬ凄まじいエネルギー弾だ。もしこいつに再生能力があるんだとしても、ここまで徹底的に壊したら、もう再生は不可能だろうってぐらい叩き潰した。

結果、必死になって化け物になろうとしていた元ゾンビは、化け物になることすら許されずに、跡形もなく消え去った。ところどころ惨たらしい残骸が残っていたような気はするけれど、まあ、死んだことは間違いない。死んだって表現があっているかどうかは知らないが……。

「やりすぎだ」

と言うランの台詞に、俺は苦笑いした。

騎士軍団を発動したらしいゾンビ男は、どうやら彼もまた何者かが召還した幻影であつたようで、組織からの増援部隊が到着した頃には、既に跡形もなく消え去っていた。

ちなみに組織の増援部隊が到着したのは、三条が市民にかけた催眠術と『エンクロージャー 囲い込み』（戦闘中に邪魔が入らぬように、術者が設定した区域に、術者が許可する者以外入れなくする技）が解ける寸前のことだつた。治癒術や修復術に長けた組織の専門部隊は、ものの数

十秒のうちに、俺の猛攻で壊れ切った世界をみるみるうちに復元していった。

そして術が解ける。

それまでの薄暗い世界が、パアッと明るくなって、やがて清々しい快晴が空いっぱいに広がるようになった。

三条は辛そうに肩で息を吐き、俺は何となく空を見ていた。

眠りから覚めた皆は、きょとんとした様子で周りを見回している。
「俺たち、何やってたんだ？」

全身をクエスチョンマークに染めた彼らは、その場に呆然と立ち尽くした。無論、彼らは、妙なゾンビ男が動員した『幻影軍団』たる騎士隊のことなど覚えてはいない。記憶消去に長けた組織の専門部隊が、『^{エンクロージャー}困い込み』内にいたあらゆる人の記憶を片っ端から消去したためであった。

第10話 市街戦（後編）（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第11話 疑惑

「いやはや、君は何でもありだね」

援軍部隊の一人として駆けつけてきたカール・タナカ先生は、すっかり元通りに戻った世界を見て、「ははは」と苦笑いした。

「それにしても、『幻影軍団』^{エクスセルキトゥス}など使って、あなたたちに攻撃を仕掛けてきた奴なんて、誰なんだろうかね？」

相も変らぬ鼻に付く口調で、ニタニタ笑いながら呟く先生に、俺は苦笑いしながら、すっかりばさばさになった長い髪をはらって、スカートの裾を整えた。

「はっはっは。ま、何事もなくてよかったよ。君には何と言って感謝したらよいやらわからんね。あ、そうそう。奴らの狙いは鷹司君だったようだが、彼女には何か特別な力もあるのかね？ 我らが組織の最大スポンサーたる鷹司グループ会長の御令嬢であるとは聞いていたが、能力者であるとは聞いていないが……」

知らんね。会長さんか、あるいは事情を知っていそうな組織の上層部にでも聞いてくれ。それにだ。何でお前が、あいつらの狙いが鷹司だってわかるんだよ。お前は現場にいなかった。俺がほとんど敵を片づけてから、のこのこ現れた分際で、何であいつらのターゲットが鷹司亜子だったと断言できるんだ。

と、心の中で呟いておいて、しかし口には出さない。なんか、ここからは妙な感じがするんだよね。危険な匂いというか、不穏な感じというか。……ま、気のせいだろうけど、胡散臭いことに変わりない。

「ま、とにかく気を付けたまえよ。私の調査によれば、裏切り者は案外君たちの近くににいるかもしれない。せいぜい君も、その力に過信することなく、裏切り者の摘発に全力を注いでくれたまえ」

なんて言いながら、先生はからからと笑った。

先生が不敵な笑みだけ残して立ち去ると、俺は再び普通の女子高生に戻って帰路についた。

「なーんかあったような気がするんだけど、思い出せないんだよね」
先ほどから、しきりに首を傾げながら呟く岡田や前原たちを尻目に、俺はいろいろと物思いに耽っていた。ちよつとやりすぎたかな？ とか、鷹司の能力っていったい何なんだ？

確かに、あのゾンビ野郎は鷹司を狙っていた……、ような気がする。いや、間違いないだろう。ゾンビ野郎の血に飢えた真つ赤な目を見ていたら一目瞭然だ。あいつは確実に鷹司を狙っていた。まあ、殺そうとしていたのか、誘拐しようとしていたのか、なんてことは分からんけどね。

「まあ、鷹司さんが狙われていたにせよ、いないにせよ、どうやら私たちを取り巻く状況はあんまり芳しくないようね」

三条の言葉に、

「まあな」

俺は静かに頷いた。

寮に戻る。

俺は自室に戻って、布団の上にごろりと寝転がった。

考えないといけないことはいろいろある。内通者のこと、あのゾンビのこと、鷹司のこと……。

「なあ、あんまり詳しいこと分かんただけどき、分離主義者ってそもそも何なんだ？」

俺はふと頭の中に浮かんだ疑問を、率直にぶつけてみることにした。初歩級の質問であるとは分かっていたが、まずそこから整理してみないと何も分からないような気がしたのだ。

んで、答えるのは例によって、愛すべき物知り参謀のラン様であった。
パートナー

「分離主義者つてのは、文字通り、組織から分離して独自の新組織を作ろうとしている奴らのことさ」

いや、まあ、その程度のことは俺でも知ってるさ。要は、何でもいっつらは組織を離れようとしているのか、そのあたりの事情を俺は知りたかった。

「ま、要するに、組織の穩健路線に反発しているのさ、連中は」
「穩健路線に反発？」

組織つてのは穩健路線をとっていたのか？　っていうか、穩健路線って何に対して穩健なんだ？　戦闘バカで、組織上層部で繰り広げられている政治的対立なんかには全く興味を持ってこなかった俺には、一から十までさっぱり分からなかった。

「無知な奴だな。少しぐらい所屬している組織のことぐらい知っておけ」

これからはそうすることにするよ。ちよつと俺は無知過ぎた。

「まあ、いい。とにかくだ。我々能力者の本来の使命は、その特殊な力を使って一般社会を陰ながら支えることにある。ま、お前のように裏の仕事に携わっている奴もいないわけじゃないがね」

そんなことは俺だって知っている。とりあえず能力があると判明してから数年間、組織の教育部門で徹底的に叩き込まれたからな。能力者が能力者として成すべきイロハって奴を。

「しかしだ。中には悪いことを考える奴もいる。その能力を使って一般社会の支配を目論んだりする奴も、中にはいるのさ」

「支配！」

「そう。実際、Aクラス以上の能力者を全員集結させて、一般世界に宣戦布告したら、まあ、俺たちが勝つだろうさ。ある研究者が出したデータによると、A級能力者全員の力を合わせると、アメリカ合衆国軍に倍するそうだ」

「米軍の倍？」

ほんとかよ？　と、ちよつとばかり半信半疑な顔をして見せる。

「とにかくだ。今の組織の上層部は、一般社会との協調を基本路線

にしている。一方、過激な奴らはそう言う上層部のやり方が気に入らない。だから組織を離れ、新組織を作って、一般社会に宣戦布告するつもりでいるのさ。だが、そんなことをされたら組織も困る。だから組織は分離主義者たちを徹底的に弾圧している。お前だって、分離主義者の幹部を何人が暗殺したことがあるだろう」

「……まあね」

まあ、俺の場合、そういう政治的事情なんて一切知らずに、ただ組織の幹部から「こいつを殺れ」って言われたから殺しただけ。

「こういう組織中枢からの弾圧に対して、分離主義者たちも黙っちゃいない。ってなわけで、両派は睨みあいが続けている。今んとこ、組織側が圧倒的に優勢だから、分離主義者たちも何一つ行動に移せていないが、いずれ奴らも暴走するだろうさ」

ランは淡々と言いきって、机の上に放り出されてあったクラツカ―をバリボリと美味しそうに喰らっていた。俺はと言うと、布団の上にごろりと寝転がったまま、別段することもないので目を閉じた。ま、疲れたしな。このまま眠るのも悪くない。

「ご飯だよー」

という鷹司亜子の甲高い声に、俺は飛び起きた。

既に辺りは真っ暗だ。時計を見ると、午後八時を指している。結構、遅い。

「ごめん！ 私もちよつと寝ちゃってて」

テヘツと額に手をやる彼女の仕草が、何ともいえず可愛らしい。

鷹司は台所からいそいそと完成された料理を持ってきて、比較的小さな食卓に並べた。

俺と鷹司の二人はいつものように席に付き、「いただきます」と言っ箸をとった。既にランは好物のペットフードをがつついている。彼に負けじと俺も思い切り喰らってやろうと、料理に手を伸ばした瞬間、

「ねえ」

と、鷹司が神妙な顔をして言った。

「今日さ、町でさ、突然爆発があつたじゃない！ それでさ、次の瞬間には、なんだろう。西洋の騎士みたいな集団が現れたじゃない。あれっていったいなんだったの？」

第11話 疑惑（後書き）

誤字脱字などがありましたら、ご指摘ください。すぐ直します。また感想、評価等、お待ちしております。

第12話 記憶消去

ちょ、ちよつと待てーッ！

な、なんで鷹司が今日の事件を覚えてるんだ？ 組織の奴らが完全に記憶を消去したはずじゃなかったのか。爆発事件が起きて以後の記憶は完全に消し去ったはずだぞ。

しかし、鷹司は深刻そうな顔をして、

「あの爆発とか騎士っていったいなんだったのかしら？」

なんて尋ねてきやがる。そりゃまあ、普通の生活をしていて爆発なんかに遭遇することなんて滅多にないし、まして武装した騎士の軍団を見ることなんてありえない。だから鷹司の疑問もわかるんだけど……、わかるんだけどもだ。なんでお前はそのことを覚えてるんだ。お前も含めて能力者以外の全員の記憶を消したはず。組織の記憶消去部隊が鷹司を見逃すなんてありえない。

「え、そ、そんな事件あったっけー」

俺はとぼけてみせる。ってか、こういうときどういう対応をとればいいんだろう。俺は側で飯を喰らっていたランに目配せして助けを求めたが、彼もまた困ったように目を背けて、テレパシー念話にて俺の心の中に『善処を求む』と言ってきた。

ぜ、善処って言われても……。

「そんな事件あったっけて、あつたじゃない！ イチさん、忘れちゃったの？」

鷹司の鋭い視線を浴びていると、俺はなんて返せばいいのかわからなくなった。

「でも、まあ、なんだか皆知らないって言うのよね。岡田さんも原さんも、三条さんだって……」

悲しげな顔をして俯く少女の様を見て、俺もまた何ともいえず悲しくなった。

「でも確かに私は見たのよ。聞いたのよ」

はつきりときっぱりと言い切る彼女を見る限り、彼女の記憶は鮮明であると言わざるを得なかった。

『記憶を消すか?』

念話を使って、ランと交信する。どうせ一人で考えていても打開策なんて思いうかばんのだからな。

『いや、お前の記憶消去は危なすぎる。彼女を記憶喪失少女にするつもりか?』

咎めるようなランの物言いに、『それ以外の方法があるのかよ』と返す俺。

『いや、ない、といえはないし、あるといえは……』

どっちだよ！　ランらしくもない優柔不断に俺は少々呆れた。とはいえ、俺だって記憶消去の術なんて使いたかねえよ。へたすりゃ、彼女の持っている記憶の全てを吹っ飛ばしてしまうかもしれないんだ。そう言えば、この前、俺が記憶消去した奴は、基本的な知識すらも失って、赤子同然の状態になっちまったかな。

「ねえ、さっきからどうしたの?」

鷹司が不思議そうな顔をして尋ねてきた。

「箸が動いてないけど……」

少しばかり悲しげな、哀愁を帯びた顔を見てみると、俺の中にもいろいろと迷いが生まれてきた。これでいいのか？　本当にこいつに記憶消去なんてやっていいのだろうか。

「あ、美味しくなかった?」

鷹司が、見上げるように俺の顔を見つめてきた。

「べ、別に……」

俺はやけ食いでもするかのように、行儀悪く食事を口の中に放り込んだ。

「で、でさ、今日のあれっていったいなんだったの？　私さ、途中から意識を失って、そこから先のことを知らないんだけど……」

催眠術のほうはしっかりかかっていたのかな？　俺はいろいろと考えながら、何と答えるべきか必死に悩んでいた。全部打ち明ける

って手もなくはないけど、会長さんはどうやら彼女にできる限り普通の生活を送ってもらいたいつて言っていたしなあ。会長さんの御気持ちに背くような真似をしていーんだろうか。

「いや、多分、それ夢だよ。夢。よくあるじゃん。夢と現実がごっちゃになつちゃうときって。夢の内容がよりリアルだとさ」

こんなんでいーのかな、と思いたくなるぐらい雑な弁明であつたが、今の俺にはこれぐらいのことしかできなかった。後はひたすら『夢』で押し通す。それでも彼女が考えを改めないなら、仕方ない。記憶消去の術をかける。

『援軍を求めるって手もあるぞ』

そこに、ランの声が聞こえてきた。

『隣の部屋に三条がいるだろう。あいつはそういう術は得意なはずだ』

ランはそう言つて、俺の顔をじつと見つめている。

『三条、ねえ……』

確かにあいつなら、そういう小難しい技は得意だろう。実際、催眠術とか^{エンクロージャー}囲い込みとかそういう技だと、俺より遙かに上手いからな。

『そうだな。三条を呼ぼう』

俺がやるよりはいいだろう。

『じゃあ、俺っちが呼んでくるよ』

ランはそう言つたきり、既にそこにはいなかった。俺はというと、相変わらず疑念の表情を浮かべたまま、「うーん」と唸っている鷹司と必死に対峙していた。

土産物があるんだーって理由で強引にわがルームにやってきた三条は、ランからひとしきりの事情を聞いていたらしく、やってくるなり、鷹司亜子の顔をぎろりと睨みつけた。

「で、鷹司さんはありもしない爆発事故があつたって思ってるのね」
相変わらずきつい言い方だ。もっと言い方を考えろよ。鷹司さん

はお前と違つて繊細なんだぞ。

「知らないわよ。とにかく、鷹司さんはありもしない爆発事故と、ありもしない騎士を現実だつて思いこんでる。……バ力なんじゃないの！」

きつぱりと言い切つて、三条は鷹司と対峙した。鷹司はというと、彼女もまたなかなか肝が据わつていて、「私は見ました！」と断言するなり、三条の眼光に負けじと鋭い視線を送っていた。

「ねえ、鷹司さん。爆発事故があつたつていうなら、何でニュースになつてないの？ 騎士が現れた、なんてことマスコミが取り上げないわけないでしょ！ それに、爆発事故があつたつていうのに、町で壊れた場所つてあつた？」

「……」

黙る鷹司。そりやそうだろう。実際、爆発事故とか騎士の襲来とか、そういう事実は悉く組織によつてもみ消されていたんだから。公式には、そんな事件はなかった、つてことになっている。壊された街並みは、組織の力で完全修復されたし、他の人の記憶も組織に抛つて消去された。なぜか鷹司だけは覚えているようだが。

「ね、それはあなたの夢よ。夢と現実をごっちゃにしちゃ、精神異常者と思われちゃうわよ」

ひどい物言いだ。だが、それぐらいの厳しさで言いきつてやるのも本来必要なかもしれない。三条はその後手厳しい口調を並べ立てて、それは夢だ。それは幻だと言い続けていた。

そして、鷹司亜子が「そうかも」と、呟いた隙を見逃さず、三条は何やら妙な呪文を唱え始めて、ぼんやりと虹色に輝くその右手を、鷹司の額にあてたのだった。

「え？」

驚く鷹司を尻目に、三条は右手に力を込める。すると、虹色がドクドクと波打つように彼女の腕を伝つて、鷹司の頭に注ぎこまれていく。

数十秒がたつ。

「ふう」

三条がため息を吐いた。終わった、という意味表示をする彼女に、俺は静かに「そうか」と頷いた。

もう、これで彼女はあの時の記憶を覚えちゃいないだろう。一安心だ。これで、ようやく美味しい飯にありつけるってもんだ。

「ご飯ですって！」

三条がぎろりと俺を睨んでくる。

「あんた、鷹司さんといつしよに食べてるの！」

そりゃまあ、ルームメイトだしな。

三条が押し黙る。俯いたまま、なんだか不満そうに顔を歪めていた。ま、俺はそんな彼女に構わず飯に手をつける。あーあ、すっかり冷めちゃった。

すると……。

「ねえ、今、なにをやったの？」

それは鷹司亜子の声だった。

「ねえ、さっきの虹色の光って、なんなの？」

第13話 非情になれ

「ねえ、さっきの虹色の光って、なんなの？」

鷹司の声。

紛れもなく彼女の声。

俺と三条は同時に固まる。部屋中の時間が止まってしまったような感じ。

な、なにを言っている？ 虹色って……。お、覚えているのか？

「な、何のこと？」

三条がとぼけてみせる。

「に、虹色って？」

三条に横っ腹を突かれたので、俺も慌ててとぼけて見せた。けれども、何やら鮮明に記憶しているらしい鷹司亜子を誤魔化すのは、ほとんど不可能だった。

「うそ。誤魔化しても駄目だよ。三条さんが私の額に触れた時、確かに三条さんの手が虹色に光っていたもの！」

「……」

こつもはつきりと言い切られると、俺たちに返す言葉はなかった。確かに虹色の光が輝いていたことは確かかなわけだし……。つてか、この人には記憶消去の術が効かないのか？

三条は目を白黒させて、見るからに明らかに動揺していた。何しろ、彼女はこういう術に関してはプロフェッショナルであるという自負を持っていた。催眠術とか記憶消去とか困い込みとか、直接的な攻撃能力は低くても、俺のような攻撃特化型能力者をサポートできる能力ならだれにも負けないと自他ともに認めていたくらいの彼女なのだ。それが、効かなかった。そりゃ、驚くだろう。動揺もするだろう。

「ねえ、さっきの虹色の光もそうだけど、まだ騎士とか爆発がなんなのかも聞いてないんだけど」

鷹司の目が疑惑の炎に燃えている。今の彼女は、俺たちが何かを知っているに違いないと思っているようだ。

何でもない。それはただの夢だ。お前はただの夢、幻想、幻覚を見ていたんだ。

と言っても鷹司は引き下がりそうにないので、とりあえず三条は鷹司に催眠術をかけて眠らせた。どうやら催眠術はかかるようである。ま、これは超能力というより、心理学を応用した技術であるから効いただけなのかもしれないが……。

ともあれ眠った鷹司亜子をベッドに運んで、俺たちは協議を始めた。このまま事態を放置していたら、必ず彼女は俺たちの正体に気づく。超能力なんてものが存在するなんてことが彼女にばれたりしたら……。組織は超能力の露見を何より嫌う。彼女にばれたってことが組織に知れたら、禁固何年かの罰則を受けないといけなくなっちまう。

「何としてもごまかすわよ」

三条がきつぱりと言った。異議はない。

「だが、どうするんだ？」

はつきり言って、俺には打開策が思いつかん。あ、そうだ。いつそ俺が記憶消去の術をかけてやるのもいいかもしれん。俺の記憶消去は強烈だからな。もしかしたら、鷹司の記憶を削りとれるかもしれないぜ。

「それは駄目。あんたがやったら、やりすぎる可能性があるから。もしも日常知識までも奪い取っちゃったら、会長さんだって怒るでしょう。今、会長さんが組織を離れたら、組織の財政は極端に悪化する」

な〜るほど。いろいろ複雑な事情がありなようで……。ならば強硬策はとれん。どうするよ。他に手があるのか？

「一つだけあるわ」

三条は静かに小さくそう呟いた。

「一つだけ？」

俺が首を傾げると、

「夢を見させるの」

と、三条は言った。

要はこう言うことだった。

今、鷹司亜子は眠っている。そこで、彼女の頭に力を注ぎこんで、今日見た光景と似た光景を、夢と言う形で再現させるのだ。そうしておけば、起きた時には、今日見たことも、リアルな夢であったのだと思うだろう。

「そううまくいくもんかね」

俺が疑惑の目を向けると、

「それ以外に良い策があるってならお聞きしますわよ。最強術者さん？」

三条はきっぱりと言って、俺を睨んできた。

ま、もちろん俺に策はない。だから反対するなら他に策を出せと言われると、結構きついんだが……。

「任せるよ」

だから俺はそう言うしかない。ま、夢だったって思わせる以外、俺たちにとるべき道はないような気がしたし……。

だから三条はおもむろに鷹司のベッドの方に歩み寄ると、彼女の額に再び手を乗せた。相変わらず彼女の全身が虹色に染まっている。

「上手くいきそうか？」

俺が少しばかり不安そうに尋ねると、

「分からないわよ」

三条は腹立たしそうに答えた。

結果から言うと、全く無意味だった。

なぜなら、翌朝、俺と三条は再び鷹司に問い詰められることになったからである。どうやら彼女は夢など見なかったようだ。三条はますます落ち込んで、もはや反論できるような精神的余力すら失ってしまっただった。

『どうするよ』

万事休す、万策尽きた俺は、参謀に支援を求めた。

パートナー

『こうなれば、やむをえまい』

参謀たる小動物は重苦しい声色で、俺の心に呟いた。

『お前が記憶消去の術をかける』

『お、俺が？』

『そうだ』

最後の手段。ランはもはやそれ以外に打つ手がないという。

『あいつの記憶が全部吹っ飛んじまったら、どうするんだ？』

俺としては、できればそういう事態は避けたい。もし彼女が男だったら、別に容赦なくやっていたかもしれないが、彼女は女なのだ。しかもルームメイトとしてまがりなりにも一緒に過ごした間柄。

『昔のお前なら必要とあらば容赦なくやっただろう』

ランはきっぱりと言って、

『今が必要な時だ。非情になれ！』

と付け加えることも忘れなかった。

『お前の記憶消去がうまくいかないのは、お前の力が強すぎるからだ。結局、お前は記憶消去に注ぐ力を制御できないため、余計な記憶まで一緒に消しちまうってわけだ。ならばお前が彼女に記憶消去をかければ、忘れてくれる可能性がある。もしかしたら、彼女は能力に対する耐性が強いのかもしれん』

なるほど。一つの可能性ではある。だが、失敗したらどうするんだよ……。と、心の中で思いながら、確かに今の俺は昔とは少し変っちゃったのかなと実感する。昔の俺だったら、どうしてたかな。男だったら間違いなく術をかけてたろうし、女だったら……。ラン

が言つように必要とあらばやっていたかもしれない。ま、何しろ女と一緒に暮らす、なんてことがそもそもありえなかったわけで、女と接する機会も少なかったから、昔の俺がどういう態度をとったかなんて皆目見当がつかん。

『いいんだな』

この際、昔の俺に戻つてみるのも悪くない。これまで暗殺指令を受ければ、ターゲットを非情にも殺害し、要人警護を任されたなら、その要人を狙う者たちを容赦なく殺してきた男が、今更、記憶の一つや二つふっ飛ばすぐらい躊躇つてどうするんだ。

「鷹司さん」

俺は冷え切つた瞳を浮かべて、きょとんとした様子で首を傾げる鷹司亜子の顔をぎろりと睨みつけた。

俺は全身に力を込める。虹色とは違う、どす黒い群青色の炎が、俺の体全身を包み始めた。

「な、なに、やってるの？」

鷹司が驚いている。しかし、俺は構わず力を手のひらに集中させる。

ぱらぱらと長い髪の毛が靡く。部屋中にヒュウウと風が吹き荒れた。

そして、俺はその細い手を鷹司の額に付けた。燃え上がるような群青が俺の体から、腕を伝つて、彼女の体に注ぎこまれていく。

悲鳴が上がる。

しかし俺は気にしない。強烈なパワーを注いでいるのだ。仕方ない。

鷹司が気絶する。よほど痛かつたのだらう。既に彼女の体は、群青色に染まつている。しかし、それでも俺は力を止めない。どこるかさらに強める。UMTがキュピイインなんて音を張り上げながら、眩く輝き始めた。

第14話 冷たい現実

俺はいつものように学校に登校し、見慣れた廊下をしばらく歩いてクラスに入ると、端っこのほうにあるわが愛すべき席に腰をおろして、授業に臨んだ。

教師たちが、相も変らぬ意味のない、ぐだぐだとした言葉を吐き続けている中、俺はなんとなく窓越しに広がる外の世界をぼんやりと眺めていた。何で空は青いんだろうか、とか、何で太陽はあんなに眩しく丸いんだろうか、なんて意味のないことをじつくりと考えているあたり、自分はよほど暇なのだろうと思う。だからといって授業をまともに受ける気なんて毛頭ないから、終了のチャイムが聞こえるまで、俺はひたすら物思いにふけることにした。たまにはこういうまったりとした時間を過ごすのも悪くないかもしれない。何しろこれまでの俺は、何かにつけて忙しすぎたかもしれないからな。何をするでもなく、ぼんやりと空を見上げていられる時間なんて、そう滅多にあるもんじゃない。

休憩時間になると岡田、前原、長妻、あるいは三条といった悪友たちが俺の周りにやってきた。昨日のドラマのこと、ファッションのこと、あるいは教師に対する不満など、まあ、言ってみればこれ以上ないほど無意味な会話を繰り返すだけであつたが、これはこれで慣れてくると楽しいものだった。

朝はいつものようにやってきた。そして昼となり、夜へと向かっていく。

クラスもいつもと変わらぬ日常を繰り返している。クラスのメンバーたちは、変わることなき笑顔を浮かべて喋っていたし、時計は相変わらず淡々と時を刻んでいた。

既に女装して過ごす日々にも馴れた。時折、俺は自分が男であつたことも忘れてしまふぐらいだったし、実際、あれだけ鬱陶しかつ

た長い髪も、今ではそれほど気にならなくなっていた。

女として過ごし、女として食べ、女として喋る。

いつもと変わらぬ空間。当たり前の日常。

しかし。

そこにあるべき人影は、一つだけ足りなかった。ふと隣を見ると、主人を失った座席と机が、寂しそうな顔をして、喧騒の中にぽつねんと突っ立っていた。

「ねえ、今日鷹司さんは？」

岡田が尋ねてきた。ルームメイトなんだから、俺に聞いた方が手っ取り早いと思ったのだろう。

「あ、か、風邪引いたみたい」

一応そう答えておく。

しかし、力はない。目を背けて、淡々と呟く。

「風邪かぁ。それじゃ仕方ないね」

そう言って、岡田は風のように颯爽と立ち去ってしまった。俺はその華奢な後ろ姿をぼんやりと見つめている。

すると、三条が近寄ってきた。彼女は彼女で、重苦しい顔をしている。

「どうするのよ？」

今にも泣き出しそうな表情だ。

「どうするって知らん」

俺は自棄気味に吐き捨てた。

「……このまま風邪って偽り続けるわけにもいかないでしょ」

無理もないと思うが、三条はらしくなく落ち込んでいた。一方の俺は、直接手を下した割りに、案外冷静だった。ま、自分でも非情だとは思っけれど、やっちゃった以上、仕方ないじゃんとか開き直っていたのだ。まあ、悪いことだとは思っていたけれど……。

「それで、組織から連絡はあったか？ 回復術者を寄越してくれるよう頼んだんだろ」

俺がそう尋ねると、三条はその眼に浮かんだ涙を拭って、

「え、えーと。それが組織に連絡を取ったんだけど、彼女にかかっている術が凄まじく強くて……、強すぎて、そう簡単に回復させられないみたい」

と、言った。

「強すぎて、ねえ」

全く他人事のように呟く俺を、

「あんたが力を強めすぎたから、あーいうことになったんでしょ！」
睨みつけるようにして怒鳴る三条だった。

その凄まじき大声に、クラス中が一瞬にして静まり返る。皆が皆、こつちをじっと見つめていた。「どうしたの？」と、岡田や前原たちが不思議そうに尋ねてきたが、

「な、何でもない」

と、三条は必死になって首を振ると、おもむろに俺の裾を引っ張って、人気の少ない四号棟のほうへと走り出してしまった。

「それでどうするの？」

三条がじとつと俺を睨んでいる。

不気味に冷たい四号棟の風が、俺の肌を撫でるように吹き抜けた。

「あんたが悪いのよ」

って、俺のせいだよ！

「そうよ。あんたが悪いんでしょ！ あんたがもう少し加減してたら、あんなことにはならなかったんだから！」

そう言われると、俺も少々答えに困った。

確かにもう少し加減すべきだったのかもしれない。けれど、加減してたら、あいつには力が通じなかったかもしれないじゃないか。何しろ、あいつはお前の術だって弾き飛ばしたんだぞ。生半な力をぶつけても意味がない。なら、俺が持つ全力を注いで、強引に術をかければ、少しは効果を出すことができると思ったんだ。まあ結局、俺の力は強すぎて、必要以上に効いてしまったようだけれど……。しかしそれは結果論であって、仕方ないじゃないか。あのときはこんなことになるとは思わなかったんだから。

なんて心に思いながらも、けれど口には出さなかった。それが言い訳に過ぎないということは、ほかならぬ俺がよくわかっていたからだ。本当のところを言ってしまうえば、俺は自分の力を試してみたかっただけなのだ。全力を注いだら、あるいはこうなるかもしれないことはなんとなく想像がついていたのに……。

三条の力すら通じなかった奴なら、俺の全力を注ぐに値する相手だと思った。実際、俺は、自分の全力というものを見たことがない。自分で言うのもなんだが、これまで俺は自分の持てる全力を注いだことなんてなかった。口では「これが全力だ」と言っても、必ずどこかに余力を残していた。そして、それで敵は皆倒れていった。だから俺は全力を出す必要性がなかったのだ。

けれど、俺は自分の全力がどれほどのものなのか、一度でいいから知りたかった。そして、今、あいつになら俺の全力をぶつけられる。ぶつけてもいい大義名分だってある。俺は興奮した。ようやく、俺は自分の持てる全力を使えるんだ。そう思うと、はじめのうちは調整しなければダメだと思っただけでも、途中から制御が利かなくなっただけだ。

だから俺は思い切り全力を注いだ。それこそ容赦なく全力をぶつけた。そこに彼女を思いやる気持ちなんて、どこにもなかったのだ。

俺と三条の会話が途切れる。

チャームが鳴っているような気がしたが、俺たちは構わず、四号棟三階の廊下に立ちつくしていた。

しばらくの時間が流れて、口火を切ったのは三条だった。

「組織は、世界最高峰の技術を持つ回復術士を送り込むって言うてきたけど……。何しろ彼女は鷹司会長の御令嬢だからね。でもさ、あんたが回復呪文をかけたらどうなの？　いつ来るか分かんないうえに、成功するかも分かんない回復術士の到着を愚直に待つより、よほど生産的だと思うけど。……あんたの力で、あーいうことになつたんだから、あんたの力なら解除できるんじゃないの？」

彼女はしきりに俺の顔をじろじろとみつめてきた。

けれど……。

すまん。俺はお前と違って、自他ともに認める典型的な攻撃特化型能力者であって、治癒能力とかそういうサポート能力はあまり得意じゃないんだ。特に、回復能力は俺が最も不得手とするところだから、専門家たる回復術士たちの到着を待つのが無難だろう。

「そんなこと言ってないで、ちょっとは試してみなさいよ。あんた、鷹司さんをずっとあのままにしておくつもり！」

「……そ、そうは言ってないけど」

治癒術つてのは、術式構成がちまちまして面倒くさいんだ。攻撃術だったら、能力を使って力をかき集め、それをただぶつけたり飛ばせばいい。面倒くさいことは一切ない。けれど、回復系の術など、サポート系能力は小難しい技術を必要とするので、面倒臭がりの俺はあまり好きじゃなかった。

「だったらやるの。やり方ぐらいは分かるでしょ」

そりゃ、分かる。分かるけど、やれるかどうかは保証の限りじゃないぞ。

「それでもいいの。何事もやってみなければわからないでしょ」

ま、確かに何事もやってみなければ分からんさ。だけどさ、不得手な人が能力を使つと、変な副作用が発生するかもしれないんだぜ。

なんて俺は心の中に思いながらも、とりあえず三条とともに俺の寮へと歩くのだった。

西の空が紅蓮一色に染まっていた。

かあ、かあ、かあと物悲しいカラスの鳴き声が響き渡る。

寮に着いて、いつものように部屋に入ると、そこには、いつもと変わらぬ鷹司亜子のぎこちない姿があった。華奢で、ちっちゃくて髪はすらつと長くて……。可愛らしい後ろ姿だった。

俺はね、その小さな背中にも、いつもの彼女を見ていたつもりだったのさ。いつものように笑って、いつものように「ご飯だよー」と楽しそうに呟く彼女の姿。何と言うことはない、普通の鷹司亜子を、そこに見ていたつもりだったのだ……。

けれど、それが幻想に過ぎないことは、次の瞬間、冷酷に俺の目の前に突き出されてきた。

俺と三条が、一步、一步と足を踏み出す。学生寮にしては随分と広い部屋ではあるが、彼女の下までそれほど距離があるわけじゃない。俺は彼女がいつものような顔をして振り返ってくれることを期待して、「ただいま」と言った。

すると、鷹司亜子は、俺たちのほうに振り向いて、こう言った。

「申し訳ありませんが、あなたたちは、誰ですか？」

と。

第15話 現れた敵

「誰って、朝も言ったでしょ。私はあなたのルームメイト。彼女は三条さん」

ちよつと困る。

鷹司は相変わらずきょとんと俺たちを見つめていたが、

「ああ」

と、ぽんと手を叩くと、ほとんど生気の宿らぬ死んだ目を浮かべたまま、につこりとおぞましき笑みを見せた。

「やつぱり、重傷ね」

三条が困ったように呟くと、

「俺の力はやつぱ完璧だ」

俺は、思わず、全く他人事のように、勝ち誇ったような笑みを浮かべてしまった。

「バカ！ 喜んでんじゃないわよ。いい、あんたはこれからその完璧な力とやらで彼女の記憶を取り戻すのよ。分かってんの？」

分かっているさ。言われんでもね。

ただ、あんまり自信はないけどさ。

なんて一人思っていると、三条は既に鷹司亜子を眠らせていた。その上で俺に早くやるよう急かしてくる。

そう焦るなよ。これでも俺だって少しは緊張してんだぜ。馴れない技を使うんだ。そりゃ、誰だって緊張するだろ。

「早くしなさい！」

三条がぎろりと睨んでくるので、
「分かったよ」

俺は静かに頷き、そしてゆっくりと鷹司亜子の下に歩み寄った。

これで記憶が戻るとも思えない。

が、やってみて損はないだろう。下手な後遺症が残る可能性がないとは言わないが、しかし実際、俺が記憶消去の術をかけた以上、俺がそれを解除するのが一番の得策であるように思われた。

俺はゆっくりと鷹司の額に右手手のひらを合わせると、目を閉じ、小さな声で呪文を唱えた。そして、いつものように全身に力を込める。群青色をした輝きが体中を覆い、そして俺はそれを思い切り鷹司の体に注ぐのだった。

やがて鷹司の体が群青色に染まる。時折辛そうな顔をする彼女を見ながら、とりあえず力を適度に調節した。この前みたいに暴走するわけにはいかなからな。

どれだけ時間が流れたろう。

実際のところ、まだ三分も流れていなかったという。けれど、俺には三時間に思えた。

力を調節しながら術をかけるってのは、やたら体力を要するようで、俺は二分としないうちにばててきた。全力に近い力を注ぎながらのバトル時ですら感じない疲労感だ。

そして、三分ぐらいが過ぎようとしている。

「もう、いいんじゃない」

じつと鷹司の体の中に流れる力の脈動を調査していた三条が言うと、俺も静かに頷き、流す力を徐々に弱めた。一挙に弱めると、これまた何らかの不手際を生みかねない。

そして、俺は手を離す。手を離そうとした。

まさに、そのときのことだった。

ピカアアアア。

って、唐突に何かが光り始めた。

見れば鷹司がいつも嬉しそうな顔をして、その左手薬指につけて

いた金色の指輪が、黄金色に輝いていたのだった。

「な、なんだ！」

仰天する俺に、

「知らないわよお」

慌てる三条だった。

ガタガタガタガタ。

学生寮の一室が激しく揺れる。地震か？ 俺たちの動揺は果てしなく強まった。

なんだ、なんだ、なんだ、なんなんだ？

揺れが収まった頃、俺は慌てて辺りを見回した。何が起きた？
何が起きているんだ？

俺は慌てて周りを見た。
すると……。

「こ、ここは、どこだ？」

と思いたくなるぐらい、平凡でありふれた学生寮が歪んでいた。

薄暗い。まだ夕方のはずなのに、夜のように暗かった。

風の音一つしない。外で聞こえていた子供たちの騒がしい声色も、
全く聞こえなくなっていた。

「な、なあ、何が起きたんだ？」

俺は側にいる三条を探し当てると、とりあえずそう尋ねてみた。

「し、知らないわよ」

まあ、そんな答えが返ってくるだろうことは想像していたけれど
ね。だけど、いったいここは何なんだ？ ってか、いったい何が起
きたんだ。

「ね、ねえ、あ、あんた……」

三条が呆然と俺を見つめている。

どうしたんだ？ 俺の顔に、何か付いているのか？

「付いてるとかそういうんじゃないくて、能力が解けてる……」

へ？ 能力が解けてるって何？

俺はとぼけたような顔をして、じつと三条を見つめる。そして、その奥にある鏡に映る自分の姿を見て……。

「げげげ！」

声に出して驚いた。素っ頓狂な声を張り上げた。

男だ。そこにいたのは、紛れもなく男だ。即ち、俺自身。『外見偽装』を施した偽りの自分じゃなくて、正真正銘、紛れもない俺自身だった。

「は、早く技をかけなさいよ！」

三条が急かす。もし、こんなところを鷹司に見られたりしたら……。って、鷹司はどこだ？ さっきから姿が見えない。

「ほお」

そこに、奇妙な男の声が響いた。

「だ、誰！」

三条が俺に代わって怒鳴った。

「誰、とはつれないね。僕だよ、僕」

新手のおれおれ詐欺か？ 僕って誰さ。官姓名を名乗れ！

しかし男は何も答えずに、代わって俺たちの前に姿を現した。モデルのようにすらつとした体形で、異国人の血を受け継いでいるためか、少し日本人離れた整った顔立ちをした男。

紛れもなく、それはカール・タナカ先生だった。

「な、なんで、あなたが……」

戸惑う三条。俺は何となく、やっぱりなと呟いた。

「まさか君が男。それもUMTの使い手だったとはねえ」

先生はにたりと笑っている。

「全然気がつかなかった。さすがに、君はSクラスでも最強と称えられている能力者だけのことはあるね。ま、いろいろ調べて、UMTの使い手は『外見偽装』の達人だってことを知ったから、偵察も

兼ねて、鷹司君にこの金色の指輪を授けたのさ。この指輪はね、もし、UMTの使い手が彼女に技を仕掛けたら、その瞬間、私をここに呼び寄せてくれる召還宝具なのさ」

俺は苦り切った顔をして、先生を睨んでいた。三条は相変わらず、何がなんだか分からぬと言った様子で、きょとんと戸惑っている。

「それとね。この宝具にはもう一つ力があつてね」

先生が一步、俺たちの下に近づいた。

「この宝具を使用した人間の持つありとあらゆる力を強制的に発動させるってものだよ」

「きよ、強制的に発動？」

「そう。だから君は、術が解けたろう。鷹司亜子君の持つ力は、強制的に全ての能力を無効化してしまうというものさ」

どうりで力が使いにくいわけだ。俺の『外見偽装』だって解除させられてしまったし……。

「ところで、イチ君。君の持つUMT、私に譲ってくれないか？」

唐突に先生が口火を切ると、

「私にはそれがどうしても必要なのさ」

と、言った。

あほぬかせ。誰が譲るか。と、俺は思うが、今の俺は鷹司によって力が制約されているので、どうにもならない。先生の方は、鷹司の無効化能力を中和する力でもあるらしく、別段いつもと変わらぬ様子で俺の下に迫ってきた。

おのれ！　だからって、最強と言われた俺が、こんなところで引き下がっていられるか！

「無駄だよ」

先生はにたりと笑う。

「彼女の力はUMTに匹敵する。彼女の能力から逃れることは不可能だよ。私を除いてね」

だからなんだ！　俺は最強能力者。SS+のランクにある正真正銘、最強の能力者なんだぜ。女如きの技に負けて、無様に跪くなん

て真似はできん。

だから俺はすつくと立ち上がった。
力を込める。

今日こそは全力を出してやる。そうさ。百パーセント全力だ。俺
は今出せる全力を注いで、目の前にいるすつとぼけた男を叩き潰し
てやるのだ！

第16話 戦い（前編）

「全く、組織つてのは実に分かりやすく面白。行動原理が完全に読めるからね」

戦いを前にした先生は、何やら余裕そうな笑みを浮かべていた。

「もし鷹司君の面前に能力者が現れたら、組織は彼女の記憶を消そうとするだろう。しかし、彼女の力は能力の無効化。記憶消去の術なんて効くわけない。だとしたら、UMTの使い手が消去の術をかけるかもしれないことぐらいは容易に想像がついたよ。強引にやれば、記憶を消せるかもしれないからね。組織としては、能力者の記憶を持った奴がいなくなればそれでいい」

「……」

「本来なら、君がUMTを使って記憶消去の術をかけた時点で、私はここに召還されることになっていたんだけどね。しかし、やめておいたよ。UMTの力がどれほどのものなのか確認しておきたかったからね。即ち、鷹司亜子の持つ無効化能力をも弾き飛ばす力がUMTにはあるのか、ないのか。答えは、あった。現に、鷹司君は記憶を失い、そして君が再び記憶を取り戻そうと術をかけにきた」

わざわざ、長々と説明しながら高笑いする先生を、俺はじつと見つめていた。もちろん、俺は何もしないし、何も言わない。こういうお馬鹿な敵は、喋りたいだけ喋らせてやればいいのだ。その方がこっちもいろいろと情報を仕入れることができる。

それにしても、鷹司の能力が『能力無効化』^{マジックキャンセル}だったとは驚いたね。能力を緩和する力は、割とポピュラーだったから、無効化能力なんてものが存在してもおかしくはないと思っていたけれど、よもや、鷹司がその使い手だったとは……。

「先生よ！ ちなみにあなたはなぜUMTを欲する？」

俺は怒鳴るように尋ねてみた。

「なぜ？ 分からんか？ それは世界最強の宝具だよ。普通、誰だ

って欲しいだろう」

そりゃそうだ。だが、こいつは、今となつてはU M Tを使用できる人間が俺だけってことを知らないのだろうか。俺と血の繋がりが無い先生がこれを手に入れたって、ただのペンダントに過ぎないんだぜ。

「くつくく。心配は御無用さ」

先生はにたりと笑つて、身構えた。

「そろそろ御喋りはやめにしようかな」

そう言うなり、彼はその全身に凄まじき力を蓄え始めた。それまでのこいつからは考えられないほど、強大な力だった。

「望むところさ」

俺も御喋りなんかよりは、早く戦いたかったのだ。先生が戦う気なら、受けて立つ。最強能力者と言われた俺の力を見せてやるぜ。

睨みあう。

互いの力の波動が絶妙に重なり合つて、先ほどからバチバチと凄まじき激しき音を張り上げている。

しかし、そんなことより特筆すべきは、先生の容貌がみるみるうちに変容していったことであろう。それまでの端正な顔立ちは、まさに鬼のようになつていったし、そのすらつとした体は、筋肉が隆起して、どんどん大きくなっている。

「なんだ、この力は……」

物知り参謀のランですら驚いている。

「この前の模擬試合のときとは全く違う。根本的に力の質が全く違うぞ」

それは俺も思う。この前の時とは、全く別人のようだ。凄まじき殺気、凄まじきパワー。こうやって対峙しているだけで、体がぶるぶると震えるなんて、何年ぶりのことだったろう。

「油断するなよ」

と、ランが言うと、

「分かってるさ」

俺は大きく頷いて、改めて、なんだか化け物のようになった先生の凄まじき形相を睨みつけていた。

戦いが始まった。

双方空に舞い上がったの凄まじき空中戦である。既に俺と鷹司の学生寮は、凄まじき力と力のぶつかり合いの中で吹っ飛び、変容した世界の住民も、三条の催眠能力によって意識を失っていた。

即ち、俺と先生と三条の三人しかない世界。

俺と先生は空中で、激しい近接戦闘を演じていた。

殴る、蹴る。殴られ、蹴られる。

お互い、その手足に凄まじきパワーを宿らせているから、その威力はプロボクサーの比ではないほど強力だった。とはいえ、お互いに防御結界を張っているから、実際に受けるダメージはほとんどないのだが……。

それでも殴りあう。蹴りあうのだった。結果、先生が吹っ飛んだ。俺が蹴り飛ばしたのだ。凄まじい勢いで吹っ飛び、立ち並ぶ家々を悉くぶっ壊して着地した先生は、空に舞う俺をぎろりと睨みつけながら、

「やるね」

と、呟いていた。

「先生！ 確かに先生は圧倒的に強くなりましたけどね、その程度じゃ全然俺には敵いませんよ。俺はまだ、60%ぐらいしか力を出していないんですよ」

実際、俺にはまだまだ余裕がある。まあ、60%ってのは誇張表現だけれど、今のところ65%ぐらいしか出していない。

「そう、か。じゃあ、私ももう少し力を出してみるかな」

先生はにやりと不敵な笑みを漏らすと、再び起き上がって、力を込め始めた。確かに言葉通り、その力は先ほどより強くなっているようだった。

「どうだ、あれが先生の全力だと思うか？」

とりあえず、俺はランに尋ねてみた。

「分からんな。だが、なんだか先生の顔、随分と無理をしているように見えないか？」

「無理？」

「そうだ」

確かに力を込めている先生の顔つきは非常に辛そうだった。それこそ、無理やり力を行使している感じ……。

「まさか」

俺が素っ頓狂な声を上げると、

「たぶんな」

ランが頷く。

「なら、先生のためにも一瞬で終わらせた方がいいな」

そんな俺の言葉に、

「そうだな」

ランは頷いた。

戦いが再び始まる。

と言っても、ほとんど一方的に俺が優勢の戦い。確かに先生はさらに強くなったが、俺も今回ばかりはかなり力を強めている。うーん、大体全力の80%弱つてところかな。ま、久しぶりに80%近い力を使えたから、満足かな。

近接戦闘。

殴る、蹴る。けれども防御結界を超えてクリティカルヒットするのは、悉く俺の攻撃。先生の攻撃は全て俺の結界に阻まれ、大した

効果を上げなかった。

再び先生を蹴り飛ばした俺は、手を天に掲げて、力を蓄えた。さながら丸いボールのような光球が生み出され、ある程度力が膨れ上がったところで、俺はそれを思い切り放り投げた。

どでかい光球は一目散に先生の下を指し、そして爆発した。まるでキノコ雲のような凄まじき爆煙が立ち込め、辺りの街並みが一斉に吹っ飛んだ。

第17話 戦い（中編）

死んだかな？

粉々になっちゃったかな？

と思つて、じいいつと爆心地のほうを眺めてみると、どうやら先生は辛うじて防ぎきつたようだった。あらゆる力を防御結界に回した結果、文字通り辛うじて助かったって感じ？ とにかく体中に傷を負つて満身創痍だし、とても戦えるような状態には見えなかった。

「先生！ 降伏するなら降伏してもいいんだぜ」

既に『外見偽装』が解けて久しい。外見だけでなく声色も女から男に変化し、まあそれはそれで違和感を覚えないわけでもないんだけれど、結果として女のような口調をしなくてすんだのは気楽でよかった。やっぱ、俺はどこまでいっても男なわけで、女になり済ますつてのは、いくら馴れても辛いのだった。

「降伏、だと」

先生がこつちをぎろりと睨んで、

「笑止！ 誰がするものか！ 貴様如きに降伏したとあつては、末代までの恥だ」

なんてあらん限りの力を込めて叫んでいた。

ま、やりたいんなら、やってもいいさ。既に力が出せる状態とも思えないけれど、まあいいさ。戦いたいなら戦つてやる。けれど、間違つちやいけないよ。先生に勝ち目はない。これからの戦いは、圧倒的優位に立つ俺が、圧倒的劣勢に追い込まれた先生を徹底的に叩き潰すだけの戦いなんだからな。

再び戦いが始まった。

先生の不屈の闘志には、全く頭が下がるね。確かに先生は圧倒的に強いけど、俺のほうがもっともつと強かつたわけで……。これだ

けの戦力差を見せられても、なお戦おうとする先生に、俺は結構驚いていた。
すると。

「おい、油断するな！」

ランの怒声が響く。俺はハツとして、先生の方に目をやった。

「お、おい。あ、あれってまさか……」

地上で辛そうに唸っている先生の周りから、によきにょきと騎士のような男たちが無数に姿を表した。どこかで見たような光景……、ってか、つい先日見たような光景だった。

「ま、まさか……」

俺が呆然としていると、

「『エクセルキトゥス幻影軍団』だな」

ランは淡々と答えた。

幻影である騎士たちは、みるみるうちに急激に増えていった。んなあほな、って突っ込みたくなるぐらいの数だった。千、二千、三千……。最終的に六千近くに膨れ上がっている。

「騎士の幻影軍団……、ってことは、この前、町で暴れた幻影たちの黒幕ってのは……」

と、呟けば、

「あいつで決まりだな」

ランが素早く頷いた。

「イチ君！ 今回の幻影軍団は一味違うぞ」
エクセルキトゥス

先生が怒鳴っている。その勝ち誇ったような声色が、俺には気に入らない。

「雑魚が六千も集まったって、俺には勝てん」

怒鳴り返してやると、

「そうかな」

先生はにやりと笑っていた。

攻撃が始まる。

騎士軍団は宙を舞うと、俺の方目指して思い切り突撃して来た。だから俺は、動かず騒がず、自らの周りに強力な防御結界^{バリアー}を張っておいたんだけど、騎士たちが地道に結界を壊し始めたので、俺は慌てて逃げ出した。

「くそッ！ あいつら、結界中和の術をもってやがる」

とりあえず逃げる。六千の敵が追ってくるのだ。まずは逃げつつ、各個撃破するしかない。

「きりがないな」

一人一人一人と敵を倒してみても、それを六千回繰り返すつてのは結構めんどい。まあ、俺も幻影軍団^{エクスセルキトゥス}を起動させればいいんだ。おそらく、先生がそんな時間を与えてくれるとも思えなかった。っていうか、多分、俺が幻影軍団^{エクスセルキトゥス}を起動している時間に攻撃するつて策を立てているに違いないのである。

なら、どでかい光球でもぶつけて一拳に吹っ飛ばすつて手もなくはないけど、既に六千の騎士たちは、自由自在に分散しており、これを一気に吹っ飛ばそうと思えば、できなくはないけど、町全部が吹っ飛びまうだろう。さっきぶっ放した光球の、少なくとも四倍の力がある。

「まずは敵をひきつける！」

と、ランが怒鳴るので、

「どうやって？」

忙しなく空を疾駆しながら、俺はそう尋ねてみた。

「まず、町の中心部に行け！ ビル群があつたらう。そのあたりなら、騎士たちは密集隊形を取らざるを得ない。そこを叩けばいい」肩の上のつかる小動物の的確な献策に従い、俺は町の中心部へと向かった。どうせ、今の俺の頭じゃ、どう考えても良策なんての

は思いうかばないから、ランの策に従っておいても問題はないだろう。

「敵を集結させたら、一挙に光球をぶつけてやれ」

「いーのかな、と少し思わないでもないけれど、まあいいさ。町なんか一つや二つふつ飛ばしても、組織が必ず直してくれる。」

やがてビル群に辿りついた俺は、そこで敵が集結するのを待ち、ある程度集まったのを確認すると、思い切り大爆発^{エクストラージョン}をぶつけてやった。

凄まじきエネルギーが町全体を包み込む。少なくとも、この周辺は悉く粉碎した。まさしく廃墟。モダンなビルたちも、こうなってしまうと、ただの瓦礫の山に過ぎなかった。

改めて見ると、密集隊形を執って俺を包囲していた騎士たちは、悉く吹っ飛んでいた。見るも無残に、首と胴が離れてしまった奴もいれば、それこそ跡形もなく吹っ飛んでいる奴もいた。

まあ、これで全部じゃないわけだけど、六千のうち二千以上は削った。

「それでも二千程度か」

ため息交じりにぼやいて見ると、

「術者を倒さんと、話にならない」

ランもまた応じた。

「つてか、術者つてどこよ。さっきまで近くにいたはずの先生は、俺が騎士たちと凄絶な追いかけっこを繰り返している間に、何処かへと消えてしまったようだ。」

「油断するな。姿を晦まして、不意打ちを仕掛けてくる策かもしれないぞ」

分かってはいるさ。気配を消す、なんてことは戦いにおいては常とう手段のようなもんだからな。

とりあえず防御結界に力を注いでおけばいいだろう。こうしてお

けば、不意討ちされてもダメージは最小限に抑えられる。まあ、攻撃力は若干下がっちゃうんだけど……。

ま、騎士どもを撃破するに問題はない。

俺はその腕に蓄えたエネルギーを次から次に迫りくる騎士にぶつけて、彼らを吹っ飛ばした。全くきりが無いんだけど、仕方ないじゃないか。まずは、こいつらを何とかした後、術者たる先生を見つけて、今度こそ木端微塵に吹っ飛ばして見せるさ。

第18話 戦い（後編）

戦いが終わって、しばらくたつ。

組織が派遣して来た部隊のおかげで、町は完全に元通り。気がつけば、さっきまで激戦が繰り広げられていた町とは思えぬくらいの呑気さで、人々はいつもと変わらぬ生活を繰り返していた。

ちなみに先生の行方は分らないんだという。どこをどう探しても彼の体は発見できず、今もなお組織による探索が続いているけれど、まあ逃げたんだろう。それゆえに組織の追撃部隊が彼の行方を捜すことになったが、彼の实力は俺が一番よく知るところだ。まず見つかるまい。

「先生は何で、こんなことを起こしたんですか？」

俺は疑問に思ったので、組織の幹部に聞いてみることにした。

「奴は分離主義者だよ」

幹部は淡々とそう答えた。

「分離主義者？ 先生が？」

「そうだ。君たちをあの学校に送り込んで見つけてほしかった分離主義者のスパイは、彼だったんだよ」

まあ、そんなことだろうとは思ったけれど……。しかし、結局、あいつは何がしたかったんだろうね。この学校に潜入して、何が欲しかったんだろう。あれはこのU・M・Tが欲しいって言っていたけれど、分離主義勢力も同一意見なんだろうか。今となっては俺以外の人間しか使えない最強宝具に、何の価値があるというのだ。

「その辺はまだ調査中だが、君にはこれから新たな任務を授けるところにする」

幹部はそう言って、俺と、その側にいた三条の顔をぎろりと睨みつけた。

「奴の狙い、目的は調査中だが、U・M・Tと鷹司亜子君の持つ能力が狙いであることは、まず間違いないだろう。使いようによっては世

界を壊せるUMTと、やはり使いようによっては最強の武器となる
マジックキャンセル
能力無効化が使える鷹司君が同時に手に入ったら、分離主義勢力は
一挙に優位に立つ。既に奴らの中の最も過激な奴らは、我ら組織に
宣戦布告し、攻撃しようと考えているらしい。もしこの二つが奴ら
の手の内に入れば、過激派が分離主義者の実権を握るだろう。とな
れば、組織と分離主義者の間で戦争になる」

なるほど。そりゃ、大変な話ですね。

組織と分離主義勢力の戦争、か……。もしそんなことになったら、
この世の中はどうなるかな。さすがに組織の修復部隊や記憶消去部
隊も手が回り切らないだろうから、世間一般の人が能力者の存在を
知るのも時間の問題だろう。もちろん世界だって壊れる。それこそ
全世界が第二次大戦下の日本みたいな最悪な事態になるに違いない。
今のところ数では組織が圧倒的に分離主義勢力を圧倒している。

抱えている能力者の比率は、組織が八、分離主義勢力が二と言った
ところ。まあAクラス以上の能力者の比率となると、組織が七、分
離主義者が三と少しばかり比率が変わるんだけど、まあ、大局に
影響はあるまい。しかし、もしここに俺と鷹司が加わったらどうな
るだろう。勢力比率は一挙に分離主義者有利に傾くって理屈も分か
らないでもない。

「というわけで、君にはこれまで以上に鷹司君の警護に回ってもら
いたいのだ」

警護、ね。ま、いいですけどね。ってことは何ですか。俺は再び、
女装してあの学校に潜入し続けなさいといけないってことですかね。

「そういうことになるね」

幹部はあっけらかんと言ったのけた。

俺はハアとため息を吐いて、がつくりと肩を落とした。

「あ、そう言えば、鷹司さんの記憶はどうになりました？」

そう尋ねたのは三条である。

「それなら気にしないでくれたまえ。どうやら、誰かさんのおかげ
で完全に消された記憶も、誰かさんのおかげで完全に復活した。ど

うやら能力無効化も、U M Tの前には無意味らしいな」

「……」

「記憶が完全復活してしまったため、今は、催眠術士たちが必死になつて記憶を忘れさせているところだよ。どうやら催眠術なら効くらしいからね」

記憶を完全に消去するんじゃないで、ただ催眠術を使つて忘れさせるだけ、となると、ふとした拍子に思いだしかねないけれど、まあ、今となつてはこれ以外の手もないんだろう。後は、彼女が思い出さないことを願うしかない。

「よいかね。おそらく逃げたカール・タナカは、君と鷹司君を狙つて再び動き出すだろう。わが組織も全面的に君を支援するが、何としても奴の脅威から鷹司君を守り通し、そして奴を滅ぼせ。よいな。これは厳命だ。結果として、カール・タナカが死んでしまったとしても構わん。……いや、本気で殺す気でやれ。いいな」

随分と好き勝手なことを言ってくれる幹部だけれど、まあそれが命令つてなら遂行するだけだ。それに、鷹司にはいろいろと思い入れがあるしね。

「それと、いざとなれば、同様にあの学校に潜入させてあるスパイたちと手を組むと良い。これがリストだ。後で目を通しておけ」

そう言つて幹部が手渡したのは、小汚い茶封筒だった。随分とくちやくちやになつていような気がしたが、まあ読めればいいので気にすまい。

「大変なことになつたわね」

と、三条が第一声。

「まあな」

俺は静かに頷いた。

「でも、やっぱりあなたは強いわね」

改まつたような三条の声色に、

「当たり前だろ」

俺はきつぱりと頷き、「ははは」と胸を張って高笑いした。

「でもね、あんたは少し自信過剰過ぎよ。もう少し慎重に戦わないと、次は負けちゃうかもしれないんだからね」

笑ってはいるが、今にも泣き出しそうな顔だ。必死に強がっている顔といえわかりやすいだろうか。俺はなぜ彼女がそんな顔をす
るのかわからなかった……、わけがない。なんとなくわかった。けれど、俺は俺で結構強がりなので、

「ふん。負けなんてあるもんか。油断しようが、俺に勝てる奴なんて、この世には存在しないんだよ」

と、言ってしまった。こういうときは、「わかった」と素直に答えておくべきだったんだろうけど、生憎俺にはそれほどの素直さはなかった。とりわけ、三条の前に立つと、いつも不必要なまでに強がってみたくなるのだった。

「そんなこと言っていると、本当に死んじゃうかもよ」

三条は笑いだした。その眼に溢れていた涙も、既にない。

「死なないさ。俺は不死身だ」

俺もまた大いに高笑いした。三条の笑っている顔を見ると、なんとなく力が湧いてくるような感じがした。

「ところで、先生は強かった？」

少しばかり悲しそうな顔をして、そんな風に言う三条の顔をちらちらと眺めながら、俺は「うーん」と考え込んだ。まあ、強かった。弱いとは言わないさ。

「ただ、何となく無理してた感じかな」

「無理？」

「ああ。無理やり力を行使していたって感じ……。あれが先生の本当の力ってわけじゃないだろう。先生の力はもっともつと弱いはずだ」

「どういうこと?」

どういうことと聞かれても、俺にはさっぱり分からないのだ。何らかの術を自分にかけているとしか言えない。

「ただ、ああいう風に出してたら、随分と自分の体に負荷がかかるんだろ?」

「負荷、か……」

そこまでして、こんなUMTペンダントが欲しいのかな? 製作者の子たる俺が使わなければ、何の力もないというのに。

「もしかすると、奴にはUMTを使うことができる秘策があるのかもしれない」

不意にランがそう言うと、

「あるいは、イチ君が知らぬだけで、奴もまた血筋を受け継いでいる可能性もある」

三条のパートナーたるシーザーがおもむろにそう答えた。

確かにそうかもしれない。いや、そうでなければ、彼が必死になつてUMTを求める理由が分からない。おそらくそうなんだろう。

だとしたら、奴には絶対UMTは渡せない。ってか、奴は何としても叩き潰さないといけない。この世の中で、UMTを使えるのは俺一人で十分なんだ。

そう思って、俺は静かにため息を吐いた。

何となく、面倒くさいことになりそうな気がした。

第19話 現れた男

「あ、イチさん！」

何事もなくなったかのように、平穏を取り戻していた学生寮の自室に戻ると、そこには、同様に何事もなかったかのように生活を続ける鷹司亜子の姿があった。

「た、ただいま」

俺は相も変らぬ女子高生姿で部屋に入ると、ソファーの上に腰を下ろした。鷹司はと言うと、相変わらず料理に打ち込んでいて、楽しそうに時折鼻歌など漏らしていた。

「ねえ、そう言えばさ、私、なんか最近変なんだよね」

変？ 唐突に彼女がそう切り出すものだから、俺なんかはびつくり仰天。もしや、彼女、催眠術が利いていないんじゃないかな。うな。

もしもカール・タナカ先生との間に繰り広げた大乱闘の一部始終を覚えていようなら……。いやいや、それはない。組織の能力者たちの実力を甘く見てはいけない。少なくとも、一日や二日で能力が解けてしまうような甘い技はかけないだろう。彼女がいくら能力無効化^{ヤンセル}の使い手だろうが、関係ない。

とは思うのだが、不安は不安である。もしも彼女が追及して来たら、果たして俺には抗弁できるのだろうか。弁舌能力は、さしてあるとは思えぬ俺なのだ。

「いやね、何かあったような気がするんだけど、忘れちゃったの」
彼女はあっけらかんと笑った。

「絶対おかしいわ。でも、思い出そうとすると、変に頭が痛くなるのよね」

そりゃそうだ。そういう術なんだから。

と、俺は心の中で嘯きながら、とりあえず話の方向性を変えてみることにした。このまま同じ話題を続けていくと、変なところで墓穴を掘りかねないからだ。俺って人間は、それほどに起用ではない

のだ。

「と、ところで、今日の晩飯……、ゆ、夕食はなに？」

話題を変える、と言ったところでこの程度の話しか出せぬところに、俺は少々やるせないものを感じざるを得なかった。

「え、あ、ああ。カレーよ」

「か、カレー」

「そう。イチさん、嫌いだった、カレー？」

そんなことはないよ。カレーは好きだよ。俺は慌てふためいた口調で、散々そう言っておくと、鷹司は実に嬉しそうな顔をして、

「じゃ、力いっぱい作るわね」

なんて言っていた。

男に戻りてー、と思ったところで、組織のお偉いさんから直々に命じられてしまった以上は無理なのである。今しばらくは、女の姿で通すより他に仕方がない。

トイレにこもった俺は、そこにある鏡と睨めっこしながら、ハアと深きため息を吐いた。

「なあ、ラン。いつになったらこの任務は終わるんだ」

俺が深刻そうな表情をして尋ねると、

「さあな。あの先生をぶっ倒したら、終わるんじゃないのか」

ランはいつになく淡々とした口調で、そう答えた。

「先生ねえ。しっかし、おしかつたよなあ。あんなところで逃げるなんて反則だ。逃げなかったら、今頃、あいつは俺がとっ捕まえて、組織に引き渡していたらうに」

「さてね、それはどうか分からんよ。ちなみに、あの先生、あれで随分本気だったようだけれど、しかし全力じゃなかった。出そうと思えば、もっと出せたって感じだったぜ」

ランはにやりと笑って、そう言った。

「知るかよ。俺だってまだ力は出せたよ。先生がどれだけの使い手

だったとしても、俺の優位は揺らがない」

「ふふふ。お前の優位と言うか、そのペンダントの力だよ。全くこの世にお前ほど卑怯で、無茶苦茶な能力者もないだろうよ。全く、その宝具はチートすぎるんだ」

そう言うつてはため息を吐くランに、俺はムツとしたような顔をして、プイっとそっぽを向いた。言われなくても、それぐらいなことは分かっている。俺だって、UMTの力に頼らねばいけぬ自分に、それなりに不満を感じているのだ。

自分の力は、純粹な自分の力とは言えない。UMT使いの能力者、って言葉の裏のは、UMTを使わねば能力を出せない能力者、という蔑みの意味合いが込められていることを、彼自身が重々承知していた。とはいえ、UMTを使えるのは、今現在、俺だけだ。ならばそれはそれで十分な能力と言えるだろう。それにだ。圧倒的な力を誇るUMTを使いこなすつてのは、結構大変なんだぞ。

「分かってるさ」

ランはにっこりと微笑み、「からかっただけだよ」と、言った。

料理が出来上がったというので、俺は仕方なく、トイレから飛び出し、リビングに向かった。

そこにはカレーが二つ置かれて、そのほか野菜とか、ジュースとかが所狭しと並べられていた。

「なんか、無駄に豪華じゃない？」

と、俺が呟くと、

「そう？」

鷹司はにっこりと笑うだけで、それ以上は何も言わなかった。

席につく。

料理を喰らう。

確かに美味い。

何だか最近、こういう生活に慣れてきたようで、少し調子が狂う。昔は、どんな生活をしていたろう。もっと雑で、汚くて、要するにサバイバル的な生活を過ごしてきたような気がする。

俺自身がぬるくなってしまうようで、嫌なのだが、鷹司とこうやって笑いながら過ごす時間というのも悪くない。昔の生活では到底味わえなかった、幸せって奴なのかもしれない。

翌日。

俺と鷹司は揃って学校に出向き、授業を受けた。なかなか学校に来なかった鷹司を案じていた友人たちも、彼女の顔を見るなり、嬉しそうな顔をして、彼女の下に駆け寄っていった。

何事もない、平凡な一日。平穏な時間。普通の空間。

悪くない。

そんな風に思いながら、授業を受けていた。

そして、五時間目を迎える。俺は何となく黒板をぼんやりと眺めながら、教師がやってくるのをじっと待っていた。退屈な授業とはいえ、暇つぶしぐらいにはなる。もっと平凡で、平穏で、普通な時間というのを味わっておきたかった。

すると……。

「遅くなった」

そう言って入ってきたのは、カール・タナカと瓜二つの男だった。いや、カール・タナカそのものと言っていい。平然と、堂々と、俺たちの前の前に、その男はやってきた。

「なッ！」

俺と三条は同時にすつくと立ち上がった。すると、

「君たち、何をしているのかね」

俺たちのことなど忘れてしまったかのような顔で、そいつはジッと、俺たちの方を見つめてきた。

「私は、ルイス・タナカ。カール・タナカ先生が急な事情で退任なされたので、弟である私が後任を務めることになりました」

お、弟だって？　しかし、それにしても似すぎだ。

俺は改めてジツとルイスと名乗る、その男を睨みつけていた。

第20話 新たな能力者

「ど、どーなってるんですか？」

放課を迎えた時、俺は携帯電話で組織の幹部と連絡を取った。瓜二つ、つつーか、そっくりそのまま、カール・タナカにしか見えない男が堂々と、平然と姿を現したのだ。弟だとか抜かしていたが、そんな話、信じられるわけがない。

もしも奴が本当にカール・タナカなら、組織の出番だろう。すぐにも逮捕し、分離主義勢力たちのことを自白させねばなるまい。及ばずながら、俺だって、その聴取に携わってよいと思っていた。『いや、ルイス・タナカとか言ったな。あれは確かに弟だよ』

幹部はあっけらかんと言ったのける。

「い、いや、双子でもない限りは、あんなにそっくりってのはありえないでしょう」

俺がそう食い下がるに、

『双子だよ。双子の弟』

幹部はそう続けた。

「……ふ、双子なんですか」

俺は言葉を失った。

『ルイス君はわが組織の幹部の一人で、Sクラスの能力者だ。ま、君には劣るが、腕はたつ。まあ、やたらと堅物で、融通が利かないところが、玉に瑕だが、それゆえに信じるに足る男なのだよ』

「……」

『そう言うわけだから、ややこしいが、気にしないでくれたまえ。彼には、君たち能力者たちのリーダー役を務めてもらうつもりだから、君も彼の指揮下に入りたまえ』

「し、指揮下！」

我ながら恥ずかしいほど素っ頓狂な声だと思う。組織の幹部たる男は、電話越しに、

「文句は受け付けていないよ。君も少しは、群れるということを知った方がいい」

と言つて、一方的に電話を切った。

群れる？ バカ拔かせ。俺にとって、この世で一番嫌いな言葉を教えてやろう。つるむことだ。

弱い奴つてのは、とかく徒党を組みたがる。己が弱さを数で補強しようつてんだから、御笑い草だ。自分の力を高めようとする努力を怠った者が、安易に頼る手だと、俺はずっと思つて来た。まあ、UMTなんて卑怯な手を使って能力を増強している俺が言えた義理ではないのかもしれないが……。

なんて考えていると、

「君が、イチ君だね」

何やら鬱陶しいような声色が響き渡った。

「誰だ？」

俺が尋ねると、

「ここだよね、ここ」

声の主は、姿なき体をぴくぴくと揺らして、可笑しそうに必死に笑いをかみ殺していた。

「そうか。姿を消しているんだな。貴様、能力者だろう」

そんな風に言いながら、俺は静かに目を閉じ、力の脈動とその流れを察しつつ、「ここだ！」と思い切り攻撃を加えた。

すると。

「ぐはぁッ」

なんてみっともない悲鳴を張り上げながら、一人の男が哀れな醜態を晒していた。

「その程度の力じゃ、俺の目を侮ることはできないよ」

俺は、露骨なまでの上から目線で、少年のみっともなき顔をまじまじと見つめていた。

「いやいや、御見事だね。全く君は見事だね。噂と寸違わぬ力量だね。いやはや、見事と言うほか、表現のしようがないよね」

世辞は要らん。見事だ、見事だと、そんなのは今更言われなくても分かつているのだ。

「あ、僕ね。岩倉ノボルって言うんだね。よろしくね」

岩倉ノボル。そう名乗った少年は、何やら仰々しく懐から名刺のような小さな紙切れを取りだすと、俺に手渡してにつこりとほほ笑んだ。

「僕の特技はですね、物まね^{モノマネ}って言うんですけどね。分かります？ありとあらゆる人の能力をコピーできるんだよね。まあ、僕が持っている力以上の力を使うことはできないんだけどね。それに、時間制限もあるんだけどね。とりあえず、君の『外見偽装』をコピーさせてもらっただね。あしからずね」

聞いてもないのに、ぐだぐだと説明を始める岩倉少年の顔を、俺は呆れたように睨んでやった。そう簡単に、初対面の人に己が手の内を明かすもんじゃないよ。もしも俺が、敵だったら、こいつどーするつもりだったんだろう？　なんて思いながら、俺は岩倉少年から目を背けた。

「お前は、組織から派遣されてた能力者の一人か？」

と、俺がおもむろに尋ねると、

「そうだね」

少年はきつぱりと答えた。

「他には誰がいるんだ？　確か、後四人ぐらいいるんだってな。知ってるか？」

とりあえず、学校内に潜入している作業員たちの顔と名前と能力ぐらいは知っておきたい。そいつら皆出し抜いて、俺一人の力で事件を解決してやる……、なんて密かに考えている以上、情報は少しでも欲しいのだった。

「うーん。……知らないね」

迷い、考え、答えに至るまでにかかった時間はたったの三秒。も

もう少し考えるよ、なんて突っ込みながらも、「知らんなら、いーよ」と、俺は突き放すように言った。もとより、手助けなど借りる気はない。情報を知らないなら、岩倉ノボルとかいうとんちきな少年に用などないのだ。

「そりゃないよね、イチ君」

岩倉が慌てたように俺の側に迫ってきた。

「僕はね、組織の命令で君を助けるよう言われているんだけどね」

そんなの知るか。組織の命令なんぞ知ったことか。俺は俺のやりたいようにやる。それが結果として組織の利益になるのなら、組織の御偉方も文句は言うまい。

「そうはいかないんだよね」

岩倉少年は、じいいつと俺を睨んできた。

「これはね、ルイス先生の指示でもあるんだよね」

「ルイス先生？」

「そう。先生は組織の大幹部でもあるからね。その先生御自ら、私にイチ君の下で働くよう指示されたわけなんですよね。だから、僕はイチ君の下で働きますからね」

「……やめてくれ。俺はつるむのは嫌いだ」

うんざりとしたように、ため息を吐くと、それでもそんなことは知らぬと言いたげな岩倉少年は、

「じゃあ、イチ君は具体的にこれから何をすればいいか、分かっているですかね」

と、言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771i/>

最強無敵のチートな最弱高校生

2010年10月11日09時34分発行